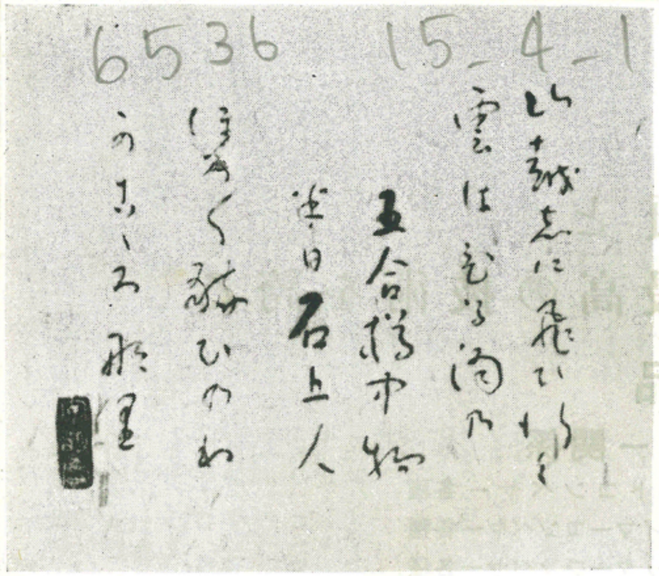
6536 15-4-1



山越しに飛び行く
雲はひる酒の
五合樽中物
半日石上人
ほろほろ酔の
わが心なり

放庵

緑丘

全国版
(通巻)No. 39号
(39年度 3号)
(編集責任者)
大阪市東区道修町三の一二
塩野義製薬株式会社内
蘆目英三
(緑丘大阪支部)
大阪市北区梅田八番地
新阪急ビル8階
サッポロビール㈱内

緑丘人の陶磁器 特集号

忙中閑

小杉放庵の軸と私

古関周蔵(大一三)

誰れでもが、かねて心に望み念じていながら果されずにいる夢があるだろう。私には長いサラリーマン生活の中で頭の中が常に何かが往来して、また身辺常に多用である何十年かを過してきています。今だにその境界の外にいるわけではありません

数年前この軸を手に入れた時、かねて私の念願した一つの姿をピタリ言いあてたような喜びを感じました。焼付けた印画紙とフィルムを重ねたように何の喰違いのない満足感でした。

この賛歌の私の現代版は……。日曜のおひる頃、朝日新聞の日曜特輯「旅」の頁も隅まで読んでしまった留守居の私は、庭の芝生の上に椅台を持ち出して、サッポロビールを抜き、遠くから聞えてくる軟式庭球のラケットの音を聞くひる酒のあとの満足した放心なのです。

まあ年に一度か二年に一度かそれもあるかなしか。心の中の自分一人の楽園です。(千代田火災会長)

うまさもでっかい
話題の生ビール
サッポロジャイアンツ
SAPPORO BEER
ジャイアンツ
サッポロビール
サッポロビール株式会社

KYC

最高の品質と
最高の技術を誇る

KYCの製品

コンベヤー関係
ベルトコンベヤー各種
クライマーコンベヤー各種
スラッターコンベヤー各種
ローラーコンベヤー各種

ミキサー関係
コンクリートミキサー各種
バッチャープラント各種

KYCポンプ各種

計量器関係
セミバッチャー各種
KYCスケール各種

KYCモータープリー各種

綜合建設機械のトップメーカー

KYC光洋機械工業株式会社

代表取締役社長　奥村正美（昭17年）

本社	大阪市北区南同心町一丁目一二番地	電話大阪(351)3091～5(代表)
大阪支店	大阪市北区末広町一二番地	電話大阪(928) 6531～5
東京支店	東京都千代田区神田小川町二丁目三番地(新小川町ビル)	電話東京(291)1216・1309 3381～5
九州営業所	福岡市中浜口町一九番地	電話福岡(3)1841・2421
名古屋出張所	名古屋市東区竪代官町一四番地	電話名古屋(94) 1 3 1 5
仙台出張所	仙台市北二番丁八三番地	電話仙台(22) 5 2 4 7
札幌出張所	札幌市南十一条西八丁目五四一の二番地	電話札幌(25)9868・(26)7964
釧路出張所	釧路市大町一丁四番地(大町ビル内)	電話釧路(2) 1 5 8 3
高松出張所	高松市塩上町一一八一番地	電話高松(3) 4392・2771
広島出張所	広島市松川町四の一番地	電話広島(61)7620・9248
富山出張所	富山市豊川町一七番地	電話富山(2) 6505・2379
工場	寝屋川・守口・吹田・東京所沢	

読者の声

人物学園史訂正

越崎宗一（大一一）

第38号人物学園史は小生執筆でなく道新記者とのインタービュー記事で苫米地先生のことも話しましたが省かれており、岡崎図書館長をされたのは中村和之雄先生で賢次郎先生ではありません。編集部に新聞を送るとき訂正しておけばよかったのにうっかりしており申訳ありません。謹んで訂正致します。

うらぶれている同窓の発見に

R・K（大一四）

同窓会や会報がとかく卒業生中のエリートのみを中心とする感あるは大いに疑問の存する所、貴誌も目下不遇にある同窓の発見に努め、援助の音頭を取るなど、新しい方向に進まれることを切望します。

青木時男君（昭12）のこと

中野清一（大一五）

小樽の「緑丘会報」十六号で青木君の「斗病生活十余年」を読み、吃驚して連絡をとった。三十年ぶりの交通が始まった。最近の便りには、「生きるためには働かなくては、というきまりきったことが、私には現実感となってこない。勿論働くことについては、体のことを考えなければならぬことは、すでに申上げたとおり、同時に病気というものに甘えそれを利用しようとしている。生活保護で生活していくことに甘んじている。そんな気分を否定しえないようです。これでは、私を励ましつづけて下さった人たちにも顔向けができない。とにかく、もう少し体力をつけて、その期間は訓練に力を注ぎ一つのポイントをつかんでとび出してみよう。そう結論を出しています」云々という一節があった。何とかして青木君を社会人としての軌道に戻したい。と私はあれこれ画策をめぐらしている。同君が在学中、私のゼミ学生だった故だけでそう思っているのではない。お互いに緑丘人としての、ごく自然な義務感がそうさせる。

同期の方々は勿論のこと、札幌支部の方々にも励ましのハガキを送って欲しい。と切にお願いしたい。

同君のアドバイスは

札幌市琴似町の山の手四条二丁目
早川喜一方

なお、青木君同様に、戦争の痛手をうけ、いまもなお苦斗中の緑丘人が日本のあちこちに息をひそめているに違いない。それらの方々をお互いの力で発掘し、援護の声をかけ合いたい。緑丘会は、母校の後援体であると同時にお互いの親睦機関でもあるわけだが、親睦の実をあげるためにも、様々な事情で立ち遅れている同窓たちに手をさしのべる必要があろう。

「緑丘」に感謝する

苫米地英俊（三代校長）

この処、連日の酷暑、水無き里の苦難、新潟の震災、寒日本の豪雨や水害、数多くの同窓の近況まで、心にかかることが続発するのを見るにつけても益々充実してきた「緑丘」に対する感謝の念はいや増します。

この大きな事業は一個人の好意に甘えておられる段階は遠くに過ぎ去っていると信じます。それにしてもこれまで払われた労と犠牲は緑丘人の胸に深く刻まれて消えることはないでありましょう。

「緑丘」のお蔭と緑丘の赤い血潮が皆の心に廻り始めてきました。頁をめくる毎に全国に散在する各年度の親しい顔が浮び出て、心が温まる感じがいたします。石田、水垣両君の提案を拝見いたしました。東京でも何人かの会員から色々談が持ち上って居ります。これは同窓の胸に自然に湧き出した歓喜と感謝の心情です。

永く続くを祈る

佐藤信雄（大一二）

「緑丘」38号ありがとうございました。この雑誌の発行から輸送事務にいたるまで、あなたならびにご家族まで大変なご苦労と知って感謝の念新たなものがあります。私には別に名案はありませんが、何とかこの雑誌が永く続くよう祈っておるばかりです。物価上昇の折多少の値上げなどはやむをえないと考えてはおります。

原稿で協力しよう

大庭定男（昭一七）

緑丘誌基金も賛成です。明年の会費にプラスαで何に分かを集めるようにされてはどうですか。小生は努めて原稿面で協力いたしたいと存じます。

「緑丘」編集に専念出来るよう本部も支部も手を差しのべよ

稲垣芳雄（大六）

「緑丘」第三十八号、去る二十九日拝受、三十日全巻隈なく通読いたしました。

「緑丘」を毎号拝見するたびに、私は「緑丘」を発行するために払われている大兄の非常な御苦労に心をいたし、いつも感謝の念を新たにしています。

今度の号の「読者の声」の欄に、石田さんや水垣さんが提案しておられますが、「緑丘」を隔月配布をうけている二千三百名という多数の同窓生は、おそらく一様に、大兄に対して心から敬意と感謝を払い、「緑丘」を三十八号まで継続刊行された大兄の深い母校愛と同窓愛に感動していることと信じます。

こういう雑誌の刊行ということはだれでもできることではありません。たまたま、大兄のように母校や同窓のためならどんな犠牲を払うことも意に介せず労をいとわぬ人があり、しかも、大兄が普通人の持っていない専門的な編集の経験や技能を持っている稀にみる適任者であったからこそ、発刊ごとにつねに内容を豊富にし七年間もつずいてきたのだと思います。しかし、これだけのものの原稿を集め、その取捨整理をし編集、割りつけをし、印刷所と交渉し、丹念に校正を見、さらに会員の名簿を整理し、発送をし、誌代を徴収するという、非常に手のかかる面倒な一連の仕事を大兄独力でやり通してこられたことは、考えてみると実に大きな重荷を大兄に背負わせていることであります。

大兄は塩野義製薬において資料室長という重要なポストについておられますから、日中は会社の仕事でおそらく手一ぱいとさっしています。したがって、「緑丘」に関する仕事一切は、公的な仕事から解放されたあと、つまり、大兄の大切な自分の時間、休養の時間を犠牲にしてやっておられることになります。

水垣さんの文章によりますと、日曜日や夜の時間を無にし、奥さまや御令息まで一家総動員で、「緑丘」の発刊をしておられると伺い、ほんとうに申訳ない気持です。

正直のところ、私たちは一カ月おきに配達される「緑丘」を、今では大きな楽しみとして心待ちにしています。

今度の号では、学生会館や計算センターの完成に関する詳細な記事を見、年を逐って発展成長してゆく母校を祝福しました。さらに、先輩、後進の方々の栄進や動静、諸会合の模様、同窓の方々の所懐等、母校と同窓に関して私たちの知りたいと願っている事柄が網羅されています。学窓を同じくした人々の心を結びつける役目を「緑丘」は、果してくれています。

私たち読者の立場から申しますと入手後封筒から「緑丘」を取り出しページを繰りつつ心楽しく読み進むばかり、あとは年一回五百円の会費を送るだけで、こと足りるのです。そして「緑丘」の読後、心に刻みこまれた印象や感想をいつまでも楽しんでおられるのです。

ところが、「緑丘」が私たちの手に入るまでに大兄のされなければならぬこと、大兄御一家の払っておられる手数や心労は実に大変なわけです。

「緑丘」発行の意義は大きく、これまでに果した役割は重く、私はそれを高く評価しています。大兄の功績は、たたえられてよいのです。

「緑丘」を三十八号までつづけて刊行されたこと、お世辞ぬきにしてこれは大兄にして、大兄なればこそ初めて為しえたことだと信じています。この仕事は、強い根気と特殊技能を必要とすることです。

ですから、水垣さんの書いておられるように、編集から印刷までは、やはり豊富な知識と経験を有する大兄を煩わすより外ありません。多分これは大兄もこころよく引受けてくださることと思います。

その代り、名簿の整理、発送、会費の取立や領収、万一費用の不足の場合の始末等の仕事は、大兄の手から他に移し、少しでも大兄の荷を軽くすることが絶対に必要です。

本部や支部が、至急この問題の解決によい知恵を示し、早急に実行に移ってほしいと思っています。

この「緑丘」を緑丘会機関誌とする建前で一言

越崎宗一（大一一）

前号に石田（昭二）水垣（昭五）の諸兄から緑丘誌経営のことで意見の発表あり、私見を申述べます。資金の募集は勿論結構ですが、本誌を緑丘会の機関とする建前で

(1)原稿を集めること及び編集の企画は墓目氏にお願いすること。

(2)会計及び発送等のことは緑丘会でやる。

(3)緑丘会全員が購読するわけではないから別途会計をし、購読会員からは赤字にならぬ程度の誌代または広告料または有志の寄金による

(4)墓目氏の後継者を考えておく必要がある。

など如何でしょうか。

住友海上火災

本　店　東京都中央区八重洲2丁目1　TEL(272)3251
大阪支店　大阪市東区北浜5丁目　新住友ビル　TEL(203)2101

故寺田先輩（大10）の思い出

佐藤正夫（昭五）

「緑丘」第三十七号の墓目英三さんの「寺田弥一郎氏（大一〇）を悼む」の一文は、私にとって、まったくの晴天の霹靂（へきれき）とも言うべき大きなショックでありました。

寺田さんには、終戦後、京城から無事に引揚げられ、文通はなかったが、京都でお元気でおられることを何かの便りに承知していました。一度ゆっくり、お目にかかり、京城時代のことなど、お話もし、お礼も申し上げたいものと、ぼんやり、考えていたのです。

それなのに、三月一八日、不帰の客になられようとは。

○

寺田さんと私とのつながりは、私が高商を卒業して、朝鮮は京城の丁子屋商店に私が勤務するようになったときにはじまります。

寺田さんは大先輩の多い緑丘会京城支部会員のなかで、お仕事が、時計、貴金属の自営ということであり比較的時間的に余裕があるということで、支部長であられたように記憶しています。昭和五年当時、京城では、私の卒業年次に近い先輩は、おられず、私一人がポツンとびはなれた若輩でありました。そのためでもありましたでしょうか、支部長の寺田さんには何くれとなく、お世話になり、よく寿町の高台のお宅にもお邪魔して、美しい奥さんの手料理でビールなどご馳走になりました。

数年経って、私も京城の生活になれ、後輩の方々も支部会員に名を連らねるようになりますと、私の店が足場のよい関係で、私が寺田さんから支部の世話人のようなことをさせられることになり、支部のことで、より一層寺田さんとのつながりを、深くして行ったようであります。

○

昭和一二年頃でしたか。私の店の新館ができ上り、売場を拡張し時計売場を新設することになりました。この時は、寺田さんに万事をお願いすることなりました。京城の百貨店の時計売場などは、当時としては、はたして、採算がとれるものか、どうか。懸念がないでもありませんでしたが、寺田さんは早速お引受け下さって、いろいろと飾り付け、商品の陳列、店員の訓練と、意を用いられておられました。当時、私は店で秘書のような雑用をさせられておりましたが、四階売場に行き、たまたま売場に見回りに来ておられた寺田さんに

「いかがでございますか売場の方は？」

「佐藤君、ああ、いまのところはボツボツというところだ。そのうちにもう少し何んとかするよ。」

という自信のある返事を承わり、お願いしてよかったと思ったことでありました。

○

二度目の赤紙で、私が北支山西省に行くことになった昭和十四年七月のことです。戦地に行くのだから懐中時計をと思い、早速時計売場に行きますと、ちょうど寺田さんが見えておられ、そのことを話しますと、

「そうか、大へんだな、これがいいよ、丈夫な正確な時計だ。これ持っていけ。」

寺田さんは陳列ケースの中から一つの懐中時計を取出して下さいました。薄皮の見るからにしっかりしたしかもスマートな時計です。手にとって、よくよく文字盤を見ると、なんと「ドクサー」（スイス・メード）ではありませんか。

こんな上等な時計を、私は実は考えていないのです。第一、そんなかねが私にはありません。それでそのことを言おうとすると、寺田さんはすかさず

「記念に上げよう、持って行きたまえ」

なにも言うことはありません。ありがたくいただくことにいたしました。

昭和十八年北支から帰り、終戦のとき京城から引揚げるまで、この時計は、実に生けるものゝ如く正確に時を刻みつづけておりました。ところが、釜山で引揚船乗船前の身体検査で、進駐軍の兵隊に持って行かれました。返すがえすも残念に思っております。

○

終戦時の京城のあの混乱と不安のなかを寺田さんが、いつ、どのようにして、京都へ引揚げられたか、申し訳けないが、私は存じません。

数十年にわたる寺田さんのご努力の結集とも申すべき、あらゆる地位と、グッドウイルとそして財産とをすべて朝鮮に残置されての寺田さんのご心境は、いかばかりか、京城の当時の模様を体験したものでなければ、よく理解しうるところではないと思います。

○

寺田さんは身長は小柄の方でありましたがいつも温顔、キチンとした服装で、少し早や口に誰方とでも、気軽に話を合わしておられました。

そして緑丘会支部の会合を適切にプロモートされ、必ず出席されました。また母校から先生や学生が見える時は、お忙しい時間をやりくりされて、駅への出迎え、市内の案内、訪問先への連絡、歓迎パーティ、そして見送りに至るまで、何から何まで親身になって、お世話下さったものでした。寺田さんならでは、とてもできることではありません。常に頭が下る思いをいたしました。

○

はじめに書いたように、引揚後、一度お目にかかりたいと念願しておりましたのに、もう、お目にかかってお礼を申し上げることは、永久にできなくなりました。

はるかに、ご冥福をお祈りいたします。

（一九六四・七・一二）

紙上片信

中村和之雄先生の思い出

佐藤信雄（大一二）

私のように英語教員として人生の大半を過した者にとっては中村和之雄先生は恩人の一人でありますし、また「緑丘」誌上でもあまり話題にのぼらないように感じますので筆をとりました。

私が和之雄先生に習ったのは三年（当時の最高学年）の時で、選ばれたテキストは、コナン・ドイルのザ・リターン・オブ・シャーロック、ホームズでした。本はロンドン出版のものでしたが、今取り出して見ると大変粗末な紙に印刷された本です。学生の負担を軽くされようとして安価なものを選ばれたのでしょうか。値段は忘れましたが、同じ年浜林先生が選ばれたトマス、ハーディのライフス、リトル、アイロニーズ（マクミラン版）のきれいな本に比べると大分見劣りのする本でした。

さてそれを習う時、和之雄先生は同一の話を三年全部に教えるというのではなくて、クラスによってそれぞれ別の話を読んで下さるのです。私の所蔵本をみますと、三つ目毎にチェックがしてあるので、私のクラスはそれらの話を習ったことが分ります。また実際書き入れもその所にしかついていません。

試験になると、先生は各々のクラスで読んだところから一題、応用問題を一題位出されたようです。だから私などには、チャンと習ったのは試験問題の内一つだけで、あとは皆応用といった格好になります。クラスの中でも勉強家は、他のクラスのところも自学自習し、分らんところはそのクラスの人に聞いて受験するという風でした。私などはそれほどの勉強家ではなかったので、多分あまりよい成績ではなかったことでしょう。

何分昔々の話で（一九二二年）試験がいつもこんな風であったかどうかは少し怪しいのですが、たしかにこういうことはありました。このやり方は大学生などには面白い一つのやり方だと考えます。

和之雄先生の講義ぶりは、今から考えると大変地味ではありましたがチャンと教えるという風なやり方であったようです。私は先生から「アドベンチャー・オブ・ザ・ダンシング・メン」というのを習って始めて暗号解読の面白味を知り、大いに感心したものでした。その後自分でポーを読み、暗号解読ではポーの方が一歩先であることを知りましたが、それでも和之雄先生にあれを習った時の強烈な関心は今でも心に残っております。

（六四・七・二九）

……

「紙上片信」について

この欄は寺田八郎氏（昭九）の提案によるものですが、現教授や元教授の片信を伝えるために設けられましたので何卒御投稿下さいますように

原稿用紙は一行十六字で御記入願います。投稿は全て編集部宛のことです。

公憤

小林啓作（昭一一）

去る六月十九日商大生が小樽市内で日韓会談反対デモを行ない五人の学生が道交法違反で逮捕されたことを各新聞が一斉に報導した。新聞が批評して曰く「日頃おとなしい商大生、過激に走ることのない典型的高級サラリーマン養成大学と称せられる商大生には誠に珍らしくこれは商大の学生運動始まって以来のことではあるまいかと」

韓国の学生デモで日韓会談が無期延期となった当時では、全く理由のないタイミングのはずれた愚挙であるし、学生の国際政治感覚の欠如を曝露した良識のない行動である。小樽署の見解ではデモ隊は署長の許可を受けた範囲を越えたジグザク行進を行ない、車輛や一般市民の通行を妨害したので道交法違反だと主張している。学生側は、警察は最初からデモ行進を挑発するような態度に出て学生の中にはコズかれたものもいる。行進中駐車している車を避けるために隊列が乱れたことがあるがこれはジグザク行進ではないと主張する。どちらが是か非か現場を見ていないから判定はつけ難い。

急を聞いて駆けつけた石河学生部長が仲介の労を採って、学生側をなだめたが火に油を注いだように燃えている学生達は石河部長の言に耳をかそうとしなかった。

石河学生部長は「商大生だけならば私の話をわかってくれたと思うしこんな最悪な事態にならずに済んだと思う。他校から筋金入りのオルグが参加し、そのアジに引きずられる結果となった。学長不在中にこんな事件を起こして残念だ」と涙を流して語ったと新聞は報道している。これが事実だとすれば私は、商大生に主体性のないことを残念に思うし他校のオルグにアジられて良識を失った後輩諸君を情けなく思うものである。

北斗寮時代から補導教官として学生の気持が良くわかり学生達をこよなく愛している石河さんとしては、泣いても泣き切れぬ程残念だったに違いなく、心中察するに余りあるものがある。昨秋行なわれた大学祭での各党政策討論会に自民党代表として私が派遣された際、共産党の広谷俊二君が「小樽商大生のように学生運動の低調な学生はいない。われわれは革命によってより住み良い社会を造るのだ」とアジったが、その時に敢然として広谷君に食ってかかった学生がおった。私は後輩ながら仲々骨のある奴がいるわい、と内心非常に嬉しく感じたのである。然るに今回のような不祥事を起こしたことは、全く遺憾至極である。いくら立派な学生会館が建設されたり、計算センターが設置されても、また近代的学生寮が出来上っても、物質だけでは本当の人間は造り上げられない。総ての事象は先ず心によって始まることを再認識すべきであろう。私は同窓会を愛する。然しかたくなかも知れないが物質万能を信んじ左翼思想の持主を進歩的と忘信する学生諸君には強く反省を促したい。

異動

栄転

篠原守（昭一三）
野村証券投資信託販売㈱京都支社長（大阪支店）
京都市下京区四条通堺町角
樋口健三（昭一三）
日本海汽船株式会社
大阪市北区宗是町一番地（大阪ビル三四九号室）
田代耕二（昭八）
東京建物株式会社大阪支店長（東京本社）
大阪市東区北浜四丁目の三八
藤井忠信（昭三六）
札幌東商業高校（釧路商業高校）
札幌市厚別町東区
山中晴雄（昭二）
協立汽船株式会社（三井船舶経理部長）
東京都中央区日本橋室町三丁目の三
広海一四郎（昭三五）
北海道銀行東京支店（大阪支店開設委員）
東京都中央区日本橋本石町四丁目二
太田正幸（昭一六後）
三菱鉱業株式会社札幌支店
札幌市北五条西六丁目二番地
佐藤忠夫（昭一六後）
雪印乳業㈱大阪市乳アイスクリーム事業部（同社東京市乳部）
浜浦英祐（昭四）
三菱電機㈱東京商品事業所（名古屋製作所）
藤田利雄（昭九）
三井銀行日本橋支店長（本店人事課長）
服部奎吾（昭二三）
東海銀行広島支店副長（大阪支店）広島市松川町一〇一ふるがいちビル内
内山三郎（昭一六後）
北海道拓殖銀行室蘭支店次長（大阪支店次長）
室蘭市海岸町五一
小山健児（昭四）
太陽サービス株式会社社長（日本生命退任）
大阪府枚方市中振二四〇〇
藍沢拓司（昭三六）
日魯漁業㈱遠洋トロール事業部（広島支社）
東京都千代田区丸の内二の二
大場寅太郎（大一一）
パーライト化工株式会社（日本カーパイト工業株式会社）
東京都千代田区神田錦町一―八（伊藤ビル）電話東京（二〇一）八七七二（代表）
柿本正三（昭一一）
THE SANGKASI THAI CO., LTD.
Sukumvit Highway, Samuaprakan, Tailand
（三井物産鉄鋼総務部）
村上賢治（昭五）
日本通運静岡支店長（室蘭支店）
静岡市御幸町二ノ三
矢野正郎（昭一二）
阪急電鉄東京支社調査室（宝塚女子旅行会館）
東京都港区芝田村町三ノ五阪急交通社東京ビル三階
電話（五〇三）〇二一一・一五六八

住所変更

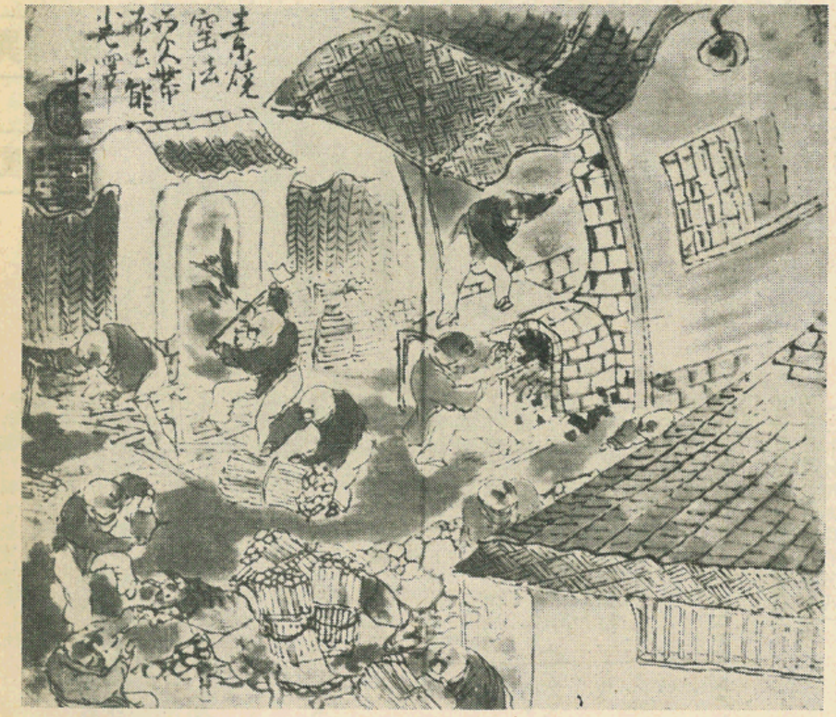
藤本孝吉（昭九）
小樽市天神町大畑六
太田正幸（昭一六）
札幌市南十二条西一二丁目
山口恒四郎（昭一一）
東京都渋谷区富ケ谷二の三〇の三
藤井武夫（　）
東京都北区赤羽台四丁目二の一四
福田耕作（昭一一）
東京都杉並区井草一の八の二一
梶川亨司（大一一）
各務原市三井町二七九
小林平治郎（昭一六）
広島県安芸郡安芸町大字馬木字鮎帖佐猛（大一一）
室蘭市幕西町七一
加藤一幸（昭三六）
浦和市下木崎三六七の四
半間清介（昭一五）
大阪府吹田市大字榎阪一五〇〇
永井久（昭八）
札幌市南十九条西十六丁目二一

事務所移転

井上恵司（昭三六）
神鋼水道建設株式会社
東京都中央区西八丁堀二丁目一六（東京建設会館八階）
桜井純一（昭二三）
株式会社新高屋商会（副社長）
大阪市北区紅梅町八八番地

軽いお食事と
お飲物の店
索の村
小樽花園町
東一ノ六
TEL(3)3800

特集・・・・緑丘人の陶磁器



観賞

大泉行雄

陶磁器の観賞について、なにか意見をという、わたしにとってはおよそ縁のない注文が、人もあろうに最も畏敬する宮地大人の後盾で、いつもお世話になっている蟇目さんから寄せられたのには、まったく手をあげてしまいました。美術工芸品のたぐいには、全然めくらであるわたしには、一言半句のことばもありません。

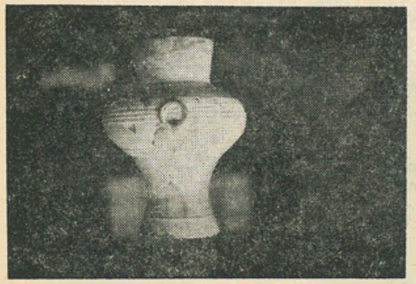
作品についての観賞眼をもたないわたしは、茶碗などを見せられてもどこがよいのか皆目見当がつかず、おしだまっているよりほかは仕方がないのです。なさけないことです。そこで少しでも勉強しようと思って時には専門家のことばに耳を傾けたりしますが。これが一向に要領をえません。仔細らしく首をひねって、「なかなか面白い」「この形が変っている」「この色が実によい。」まずざっとこんな調子です。その面白いとか変っているとかいわれるところが、いったいどう面白いのか、どう変っているのか、こちらが盲目の悲しさに一向わからないわけですが、しかしまた、あえていえば、観賞はひとひとによって異なることでもありますから、いわゆる人の本当の肚のなかは結局誰れにもわからないのではないかとも思うのです。早い話が日曜日のラジオの「音楽夢くらべ」をきいてみても、専門家同志のあいだにすら、たびたび意見の対立がでてくるのをみますと、一層右のような感を強くするのです。

もう四年ばかり前になると思いますが、重要文化財といわれていた焼物の壺が、実は古い発掘物などではなくて、まっかなニセモノだと大さわぎされたことがありました。専門家のあいだにさえ、こんな問題がおこります。この記事をよんだとき、わたしは急に気持のこだわりがほぐれ、一種の安心感に充たされました。それは作品の観賞についてのコンプレックスから解放された気持でした。その道の専門家だって、この調子ではないか、といったような気持の軽やかさでした。そしてそのときこれからはわたしも、余りオジオジなどせず、度胸をすえて「なかなか味があるではありませんか」などと大胆にいってやろうと決意したことでありました。めくら蛇に怖じずとは、まさにこのようなことを申すのでありましょう。

（大一一　神奈川大学教授）

漢の緑鐘（酒壺）

八幡藤次郎



漢時代の所産であるから二千年以前のものであるが何帝時代のものかは不明である。釉薬としては自然釉を除き世界最古のものといわれているようだ。この釉薬は低火度で焼かれたものと述べられているが指先で弾いてみると金属音がするところをみると胎土の方は相当の高火度で焼しめされたものと思われる。土は赤土である。土の色は異るが堅さは須恵器または新羅と同程度かと思っている。

高サ	三十二センチ
口経	十三センチ
胴経	二十二センチ
底経	十三・五センチ
高台高サ	七センチ

胴の部分に左右一対の虎面があって鼻に環が下げられているが遊環ではなく胴に密着している。

緑釉の大部分は水銀化して白色に輝いている。首の部分に若干緑釉の名残が現われる程度である。

この壺は小山富士夫先生の箱書付である。（大一一　興亜海上火災）

古九谷

神沢重治

北陸路にも古来多くの陶窯があった。その中で後世もっとも高く評価されているのは古九谷である。

寛永年間、大聖寺藩主前田利治が家臣に命じて山中温泉の渓流をさかのぼった九谷の里で窯を創めたのが九谷焼のらんちょうである。一時中絶したが、文化文政期に入り加州一帯にふたたび製陶熱が高まって春日山、吉田屋などの諸窯が、それぞれ特技をふるって名器を世に出した。

そのうち春日山は文化四年（一八〇七）金沢卯辰山の麓に、名古屋生れの名人青木木平が築いた窯で、今は跡方もないが、その遺作品は数奇者垂涎の的となっている。そのころ藩主の姫が輿入の際、祝儀用として陶盃百個を春日山窯に命じて特製せしめ主なる家臣一同へ頒った。殿よりの拝領品であり、数が限定されていたので稀少価値は百%、ことにコワレ物であるから百余年を経た今日では果して何個残存しているであろうか。時たま加越能の旧家の所蔵品売立の際、その祝盃が展示されると万金を投じて奪い合いの状態である。私は富山のさる古美術商の好意により、その一つを格安に入手することができた。直径約三寸、水色素地の平盃で、見込に鯛と葦を淡彩で描き、その周囲から裏側にかけて〝目出鯛に折敷て伊勢のはまほき〟と祝い文句を朱で記してある。

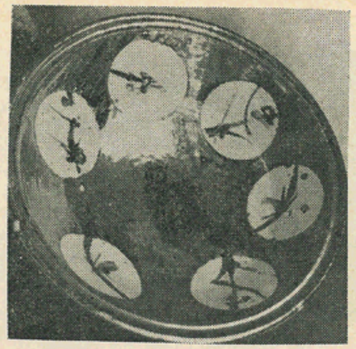
素朴にして雄健、それに物のあわれといった情操をも併せ湛えた、例えていうならば、剣豪宮本武蔵に象徴された純日本精神を、私たちは古九谷を観賞することによって味わうことができる。

（大一一　北陸代行㈱）

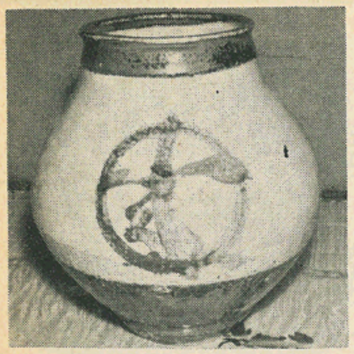
おてんぐ話

まぐれあたり

M・Y生



浜田庄司　柿軸丸紋盛鉢（1尺9寸）



河合寛次郎草花図壺（高サ8寸3分）

三十八年の春、私と家内が所用で京都へでかけた途次「現代日本陶芸展望」の会が、岡崎公園に新設された国立近代美術館で開催されていたので、偶然立ち寄った。

富本憲吉、加藤土師萌、石黒宗磨ほか当代著名陶芸作家の名品がズラリと展示された。

このとき驚いたネ。その展示品中、私の所持品と全く寸分違わぬ二点が展示されていたことである。一つは河井寛次郎の壺と、一つは浜田庄司の盛鉢であった。

河井寛次郎の作品には「鉄砂と辰砂の草花模様の壺」一九三五年作とあった。これは私が阪急美術の骨董屋さんから、数年前今から思うと、ただのような安値で手に入れたものである。

また、浜田庄司盛鉢は三十五年ごろだったと思うが、難波高島屋で催された現代工芸名作展の出品作であるから、まぐれあたりとは言われないかも知れないが、これとて私が自ら好んで求めたもので無く、ひよっとしたはづみから、転じて私の手にはいったのだから、今から思うと、やはり掘出し物であった。この品は成るほど、豪壮な逸品ではあるが、あまりでかいので、私宅床の間にはとても、あけびたく、位負けするので殆んど出したことは無かった。

古薩摩徳利

ところがこの二品とも偶然にも、いま申した通り色調、型状、大きさなどが、余りにも寸分違わないのでわが家からそっと脱けだしてきたものではないかとさえ疑がわれた。しかし、私のような者が持っていた品が、国立美術館の出品作と同一級のものであることについては、いささか得意を感じた。

もう一つ持っているまぐれあたりの物で、古唐津の徳利がある。これは戦後のゴタゴタ当時、家内とともに心斎橋の道具屋から、今の煙草代ぐらいで買ったものである。古いものに似ず形が整然として無既であり気品が豊かに備わっていたので花入れとして使っていた。

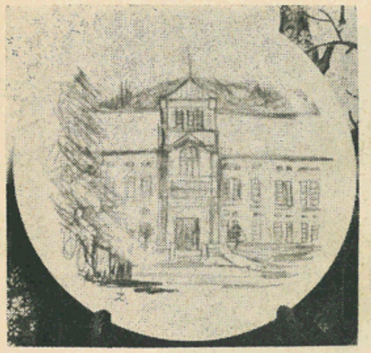
ところが陶芸評論家、安田憲之さんが、これを私宅でみつけ「古さつまの名品」であると折紙をつけていただいた。そこで今春すすめられるままに、日本民芸協会主催、高麗橋大阪美術倶楽部で開かれた「古代徳利展」に出品して、各家所蔵のご名品に伍して、出展の栄に俗し、各位からお褒めのことばをいただいた。

ほかに道具屋の店さきで、何となく心惹かれるままに求めた、呉須赤絵鳳凰文皿八寸皿と、古染付天啓仙人図九寸皿の支那陶器がある。

だした金が、余り小額なので、私の眼識では真贋さだかならず、しまってあったのだが、先般、現代陶芸作家としても、第一人者であり且つ支那古陶鑑定家として重要文化財保護委員をしておられる加藤土師萌さんの来阪を機として、みてもらったところ真物であることが判り、早速箱を新調して加藤さんから染筆していただいたので、やっと日の目をみることができるようになった。

天啓古染付仙人皿

またここで、もう一つ披露したいものがある。それは墓目英三画伯（昭一一）が描かれた陶画皿である。これはいま将に壊されんとしている母校玄関正面図を描いた貴重品である。これは墓目さんから、ただで貰ったものであるから掘り出しもの以上のものである。近くこれには、立派な陶額の装禎を施し、記念品として母校に寄贈したいと思っている。



墓目英三氏　母校玄関正面図

私は元来、陶芸品には趣味がある。だが名品ともなれば所詮、高嶺の雪である。だから私はいつも作者や作家名にこだわらず中堅または無名作家の品でも逸品であると思ったときは、ちーっと、手にとって一応観賞させて貰う。しかしお値段を聞いて、身分不相応だと思うと、いつも手を引っこめる。だからいつも、がらくたの中で楽しんでいる。

在銘品を大切にする風習も尊いがそれよりも分に応じ、自分の意気に投合した作品のなかにあることは楽しい。

愛玩には欲は一切無用である。

（大一一　協和商事㈱）

前田青邨

中国の焼物は精巧だが、じっと見ていると技巧的な一種の冷たさが感じられてくる。

先だってピカソ展を見てきたが、彼も絵をかく合間に盛んに陶器を作っているらしい。僕みたいにこたつに当って土をひねるなどという程度ではなく、彼らしく思い切った仕事だ。とにかく、あれは大べら棒なおやじだ。日本人の持っていない、おそろしい馬力がある。

ピカソの焼物だって作っている時は僕が香合をひねってのと同じ気持だろうと思う。これを作ってどうしようの、有名になろうのと考えるわけではあるまい。とにかく彼は大物だ。

（芸術新潮九月号から）

わが家のせともの

大泉宗次

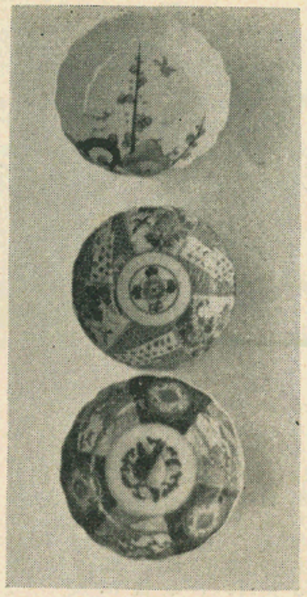
昭和十七年青森から札幌、二十二年札幌から仙台、二十五年仙台から大阪へと、引越荷物をはこぶたびごとに、わが家のせともの は、無遠慮にこわれて満足なものは、きわめて数少なくなった。せともに対する知識は、中学時代地理の先生から教わったのが、かすかに残っているだけで六月の十日会席上、特集号の予定を聞いて、おぼろげながら記憶を呼びかえしたにすぎない。知識もなく趣味もあまりないこととて、わが家のせともののうち、ご紹介できるものはわずかに次の数点にすぎず、家宝らしいものなどは一つも持ちあわせていないというのが現状である。

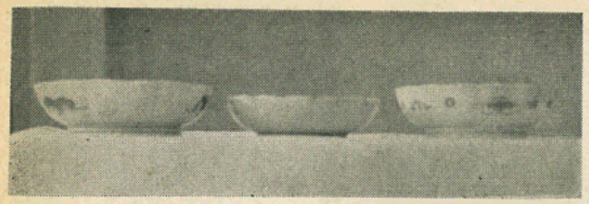
一、清水焼
　青鳳造　茶注　彩色菊花画
　竹泉造　菊竹　呉洲赤絵茗銭
　春峰造　盆巾筒
　卯之助造　葡萄唐草喫烟具
一、九谷焼
　作者不祥　花模様極彩色花瓶

（大一〇　日本生命済生会）

三平皿

文山雅弘





三平汁は郷土の代表的料理である。寮生活者には三平汁も知らずに卒業された方もあろう。

塩鮭にササゲとイモを入れた塩バイ三平汁はこの皿になみなみと入れられ、フウフウ音を立てて夕食をすました憶い出はつきない。

この三枚の中二枚は九谷焼で、作りも同じである。然し一枚は小紋で、厚手のいわゆる瀬戸の安物で庶民的な作品である。ある時はタワシや洗粉入れにもなるようなつまらぬ瀬戸物ではある。北海道に鮭も寄らず、大きな漁場も一獲千金の作戦に疎誤を来たして没落するに従い、その人々が北海道を去ると共にこの三平皿もまた姿を消して行く運命をたどることであろう。

私はこれらのことを思い、母に乞うて蔵の奥にある筈の三平皿を所望した。母はそんなつまらぬものをと、つぶやきながら三種類の異った模様の皿をならべて入手のいわれを話してくれた。

私にはこの三枚の皿が小学校時代の郷愁を呼び、そして身欠鮭のサキリの下をくぐった思い出やムシロに乾かされている鮭粕の中から数の子をよって、噛りながら通学した小学校の校舎までが思い出されるのである。

もう間もなく北海道からこの三平皿も姿を消して行くのであろう。

（昭一一）

パキスタン「ムルタン」焼 (multan)

佐々木嘉夫

「パキスタン」の「ラホール」市より、西南二〇七哩の古都「ムルタン」の産物。人口十万余の砂塵、暑熱、乞食、共同墓地の四不快指数の都市と悪口をいわれながらも古都の貫録にて商工、政治の中心地として繁栄してきた。近来は紡績業も発達しているらしい。私は割れ易い素焼ながらその彩色（特にペルシャンブリュー）に魅せられて幾度か焼直させ無瑕物を撰別して完全な包装して奥地から孟買、更に日本へと運搬したら、またしても何割かの破損物を出した戦前の苦い経験が想出される。孟買でも奥地の四、五倍の値段で売れて居た。矢張り稀少価値と満足感の生れる所以とでもいいましょうか。（老生所蔵品写真参照）

（大八）

箱館焼のこと

越崎宗一

「緑丘」が、緑丘人の「陶磁器特集」を計画され筆者にも誘いが寄せられた。おそらく支那朝鮮から伊万里九谷を初めお国焼きやら現代の個人作家の名品までゾクゾクと愛蔵品が登場するのではないかと思うが、その中へ北海道の郷土焼物を一つ割込ましてもらう。

幕末北方の風雲急を告げたころ、函館奉行が産業振興の目的で、美濃から陶工為治、岩治を谷地頭に呼び築窯し安政六年から製造し始めたのが箱館焼である。陶土は美濃からも取寄せたが湯ノ川松倉のものをも用いたといわれており、地色が極淡い藍を帯びた染付磁器である。

家蔵の茶入(一)には地紙に尻沢辺（スサビ、啄木墓で有名な立待岬の下の浜）の海岸の景が描かれ、中秋の名月がかかっている。半面には野花が描かれていて画家の名は判らないが、絵付が実に達筆である。腰に「箱館」の銘がある。京都の茶人も箱館焼を珍重しているとか、一度月釜に出したことがある。

もう一つ「青華茶盌」と箱書された大湯呑(二)は肉厚の大筒型だが幕末アメリカ兵（恐らくペリー提督来航の時）が箱館市中を横行濶歩している光景の染付で頗るエキゾチックな代物である。「亜墨利加人箱館町家往還図、応需松月造」の文字が入っている。内側に唐画風山水が描かれており高台の中に「岩二」の銘が入っている。雪の夜静かに炉の釜をたぎらせつつ富山の友人より送り来たる銘菓「うす氷」に舌鼓を打ちつつこの筒茶碗でいただく一服はまた格別である。余り知られてないが、郷土の焼物を緑丘学兄に御紹介する次第である。

（大一一）

（一九六四・五・二八）

御投稿される方に

原稿用紙は一行十六字で御願いします。

用紙希望者は御申出下さい。

広告マッチと美術印刷・紙工品

是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕

株式会社 三優社

京都市下京区寺町通松原下ル

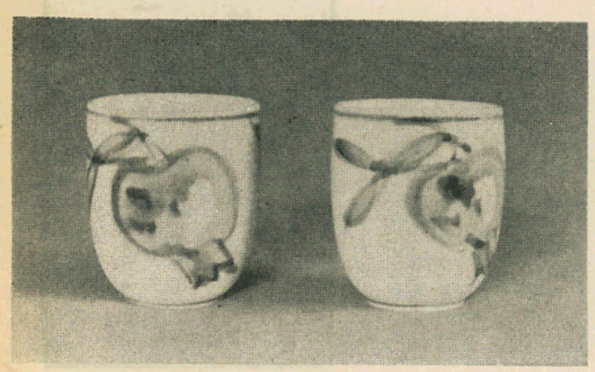
TEL. (35)0271・4950・7713

取締役社長　山村太兵衛　(昭12)

高松の思い出

近藤悠三先生の作

樋山三郎



今から六年前私は前職時代（三井銀行）大阪から四国高松に転勤を命ぜられた。京阪以外に殆んど出たことのない私にとっては、讃岐に遠島を申付けられた流人のような気持もして、二月粉雪の舞う宇高連絡船のデッキから見た赴任の夜の高松は何かわびしいものがあったことを覚えて居る。駅から南下する大通りが戦災後のもので、幅が無暗に広いだけに一層さむざむとして中々急には馴染めそうもなかった。それでも日がたつに連れて住めば都の喩えの通りいつのまにか段々様子がわかってきた。

徳川の御連枝松平公を藩主に戴く由緒深い十万石の城下町。気候風土に恵まれ米塩はもとより甘蔗や綿までできる天産の豊かな土地柄で藩侯は、公称石高を遙かに上廻る実収だったとか、君、民おしなべて鼓腹撃壌という有難い御治世だったという。当然の結果として昔から高松には風雅技芸の道や嗜み事が盛に行なわれ今に至るもやや京都に似て趣向情緒をいう一面がある。聞けば花柳界における芸道の修行は中々厳重を極める本格派だとか。

私共が得意廻わりの折もよく、抹茶のもてなしを受けることがあった。脚は痺れる茶室の鴨居に頭をぶっつけるという全くの野人に茶の心得があるはずはなく、これにはいささか降参しました。

訪問先の一軒に屋敷町に住んでおられるKさんという人があった。お年は七十の前か後か、郊外の工場は腹心に任かせて、御自身は人も羨む悠々自適。非常な釣好きで殊に川釣では正に名人の域に達して居られる。洒脱と枯淡味を適当に兼ねそなへ、また実に話題の豊富な座談の大家。私の下手の横好きな釣談義の合い槌をどう思われたか、家も近かったので商売気離れて出入させて頂いたものでした。時には琴平辺の池で鮠釣りの実地御指導をいただいたこともある。逸早く私の野育ちを見抜かれて、苦手の御抹茶は出されなかったが、何かのはずみで高松名産きんま塗りから話題が陶磁器へと転じて行った。私の心許ない応答にもかかわらず、次第に話が進んで別室から御茶碗とお湯呑みを持って来られた。白地に簡単に柘榴の絵が染付けられて心ない私にでも、何となく品のある涼しさのようなものを思わせる。だがそれ以上のことは皆目判らない。全く犬に星といったような面目ない始末だったのに帰り際、その御湯呑と杯を下さると仰言る。有難く頂戴して帰ったところにちょうどその日、大阪から来合わせた愚妻が見るなり、これはこれはという。愚妻計らずも忘れ残りのお茶の智識を憶い出したらしく、大いに欣んでいとも大切に戸棚の奥深くしまい込まれることとなったのだが、これが高名な近藤先生の作品であったわけ。Kさんは先生の御兄様であった。

その後も四方山の御話を伺うのが楽しみで、何回となく御邪魔しておるうちに箱書までお手配頂き爾来我家唯一の家宝として秘蔵しておる次第であります。

あの時を契機として小生に陶器趣味が開眼されておれば、懐しい高松の憶い出に更に一層の意義を加えたであろうのに、性来の野性、遂にそのことなくして今日に至る。どなた様にもまことに申訳けなく恐縮致しております。

三九・六・一四

（昭三　富士工務店）

李白陶酔
古関周蔵

『山越しに飛び行く雲は、
ひる酒の
五合樽中物
半日石上人
ほろほろ酔ひのわが心なり』

と小杉放庵の小品の画賛は私の心深く秘めた、現世脱出の夢幻境であるが、ここにまた一つ私の愛玩措く能わぬ人形をお目にかけたい。

古染「李白」弘治年製

と古びた箱書きのある古陶であるが、李白が呑みつくした酒壺を傍に、陶然として、片足を投出し、両拳は内側に枉げて膝の上におき、頭を少しく右に傾けて瞑目して微笑を含んだ恍惚たる姿であるが、良くその顔を見て下さい。これほど佳酔の中に沈潜した無我の表情は、画筆を以てしても中々の難事と思われるのに（お愛嬌の鼻の頭が少しく欠けてはいるが）この現世を一切解脱した無邪気な表情をよくも陶芸で表現したではありませんか。

私は折々これを取り出しては、日々の住みにくい、時として、堪え難いときさえ感じる俗煩事の生活から、一瞬にして転換して、作者の至芸に陶酔して、一箋の微薫を思い、魂は、飛雲とともに山の彼方の空遠く飛翔するのです。

（大一三）

祖父の血に生きる近藤悠三先生

大阪陶芸教室　水野清亀

現代の陶芸家のうち呉須の絵付けにおいて第一人者として高く評価され、海外にもその名の知られている近藤悠三先生は、五十幾年の陶歴をこの一筋に生きぬき、何者とも妥協せぬ一徹の芸術家である。京都美大教授、日本伝統工芸会理事としての名声の人近藤悠三よりも、陶工としての人間近藤悠三に一度接した人はその人がらからにじみ出る信念と温さに忘れ難い強い印象をうけずにはいられないのである。

この人がら、この信念、この温さこの正義感は悠三先生の血管の中にいまも祖父近藤正慎氏の血が波うっている故であると断ずるのは過言ではないと思う。

京都の維新史の一頁を飾る近藤正慎氏については知る人もあると思うが、もと京都清水寺の寺侍、否かつては清水寺蔵海上人の門人にて僧月照と並び称せられた俊秀で、清水寺金蔵院の住職とも一時はなられたが故あって帰俗し、寺侍となられるについては本人の精励と才気の故ではあるが月照の厚誼と友情が多きかったと伝えられている。

維新の風雲急をつげ安政の大獄の前、安政五年九月十日、西郷とともに薩摩に下る月照を伏見の乗船場に見送った正慎氏は、十月三日には西町奉行の与力に捕えられ、六角の牢に投ぜられたのである。獄中のあらゆる拷問にたえ、今日の言葉でいえば黙否権を行使して、西郷や月照のこと、その他同志の行動について一言ももらされなかった。しかし獄中に於て衰弱のあまり夢うつつの間にでも若し万一、もらすべからざることをもらしては一大事と思い、十余日の絶食のあと、獄の壁に頭をうちつけ、舌を嚙切って自殺されたのである。それが悠三先生の祖父正慎氏である。

（近藤悠三先生作）

この反骨精神、この正義感、この友情、この一徹さが悠三先生の芸道一筋の中に生きていることを知ることにより人間近藤悠三先生を知ることができると思う。

北海道中央バス株式会社

取締役社長　松川嘉太郎

専務取締役　杉江　猛（大14年）

本　社　小樽市

地方営業所　小樽　札幌　岩見沢　滝川

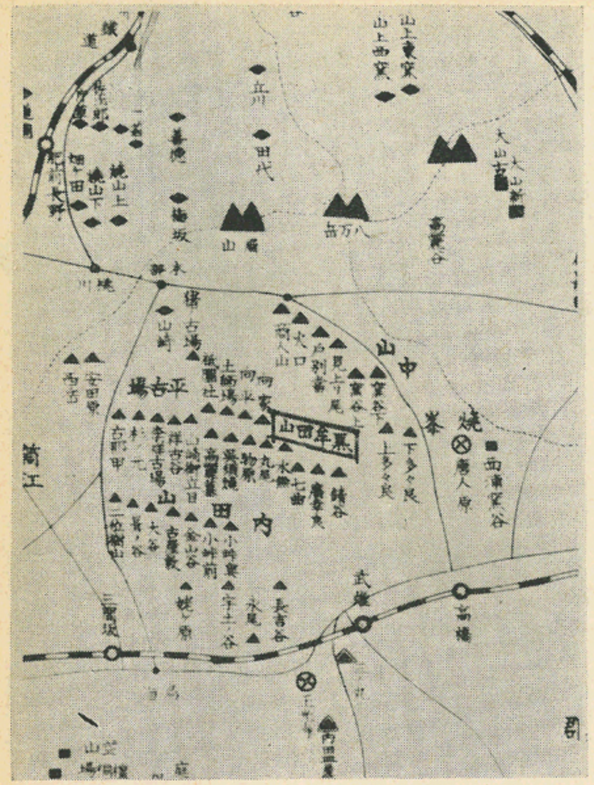
黒牟田焼

宮地邦介

今度九年振りで家内同伴故郷の佐賀へ帰ってみました。

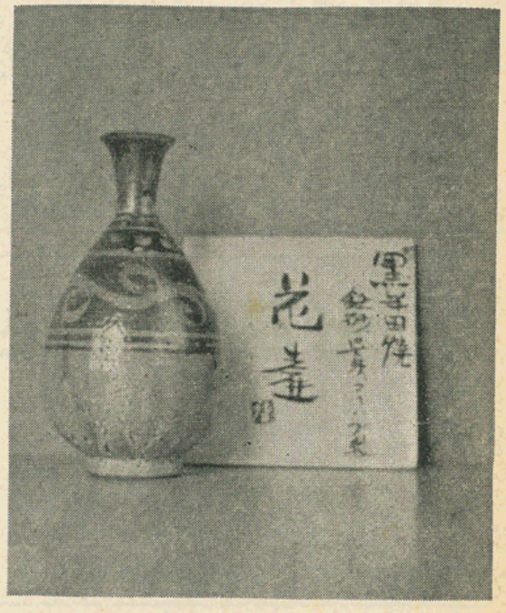
二日二晩産まれた家に滞在いたしましたが、当主の兄は既に私以上にうしろの方に神（髪）がまします老爺となり八十歳を越した二人の姉も腰は曲がり、雪霜をいただいていましたが、共に仲々の元気で、家の子郎党に守られながら集ってくれ、心尽しのもてなし振りは身に浸みて有難く、今更らながら郷里を持つことの幸福を心ゆくまで味うことができました。かくて老爺、老婆達の行末永く健康であれかしと祈りながら惜別して一日を費やし、陶業地を訪ねることに致しました。

有田では、世に知られた香蘭社や深川製磁等々、歴訪いたしましたが何れもそれぞれの特色を生かした有田焼の粋を集め、色調も鮮かに百花撩乱の美を競い、大いに食指が動きましたがそこはそれ懐具合とも相談し、手頃のものを一、二求め心を残しながら更らに武雄市武内町なる黒牟田郷を訪れました。



折柄の大雨を突いて山峡深くわけ入り、ここ黒牟田焼の本家、丸田窯にたどりつきました。

当主丸田正美氏は人間国宝浜田庄司先生に師事し、良く黒牟田焼の伝統を守りながら、新しい時代の民芸陶器の生産に起ち上り、さかんだった往時の黒牟田の面影を今にとどめて、肥前民芸品としての復興と技術保存に専念しておられる真執にして若き陶芸家であります。昨年、一昨年と連続して国展に入選され、益々意欲的な研究、作成に励んでおられ私室は処せまきまでに、色々の作品が列べられておりましたが、有田焼のけんらんさを咲きほこるダリヤにたとえば丸田焼のそれは、忘れな草の素々たる姿にもたとうべく、訪う人も稀れなる静かな山家に、雨の音を聞きながら、この若き情熱の陶芸家と対談数刻を過し得たことは私の終生忘れ得ぬ思い出となるでしょう。



乞うて、二、三の逸品を割愛して貰いましたが何れも素朴な親しみ易い意匠形状と釉調があって、心なごむ品々でした。

仰も黒牟田窯は桃山末期の慶長元和の頃（約三八〇年前）に朝鮮の陶工宗伝と共に帰化した郡団陶工の開窯によるもので、開窯以来窯の焔は山間に燃えつづけ、肥前一円の庶民の日用雑器のすべての種類を焼成していたとのことです。

その伝統陶技は在来の古唐津の北朝鮮陶技の中に李朝中期の作調、文様が表現され、更に往時の肥前の土着民の生活感情が流れていたと申します。

ところが時代と共に、これらの郡窯が次々に姿を消して只今では丸田兄弟の二つの窯だけが人に知られているに過ぎません。

【次頁上段右へ】

作陶三昧

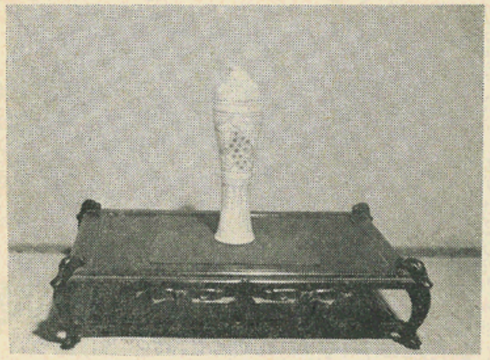
喜多村久盛

民芸品が漸く脚光を浴びて参りました今日、丸田窯を訪れ得た私は心からその発展を稀いながら山を下った。

それにしても私はかつて、赤膚焼（奈良）の陶芸家橋本正柏氏の「陶芸の観賞」という一文を読んだことがありますがそれに「李朝陶芸のもつ素朴と哀調は朝鮮民族の感情とか思想を表わしている」と書いてありましたが李朝陶器と時代を同じくし陶技を同じくした黒牟田焼が、等しく肥前土着民の感情とか思想を表現していたことを知り、民芸品としての面白さに新らしい興味を覚えました。

持ち帰った黒牟田焼は長く私の目を楽しませて呉れることでしょう。

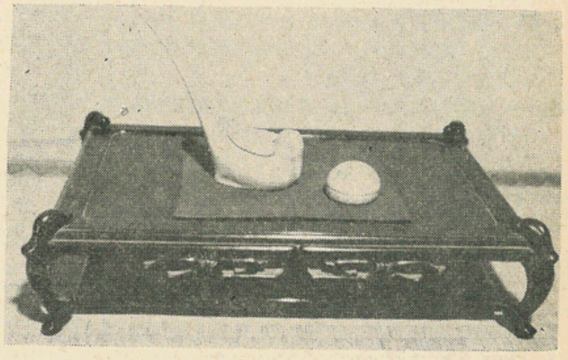
（大一一　日邦工業㈱）



海井漠山作　一輪さし

床脇の違棚に小さな花瓶が一つ載っている。それは瓶子を長く引伸ばしたような恰好の一輪挿で淡青色の地に鼠色の線で模様が描かれ真中のふくらみには、葡萄の模様が焼きつけられている。全体の感じは異国的で古いもののように思われるのであるが、実はこれは今は亡き義父の形見ともいうべき作陶の一つである。

義父は岩国の出身で若い頃朝鮮に渡り、昔の京城で土産物などの店を経営し、独創的な商才に恵まれていたので成功を収め相当の財産を作ったのであるが、やがて陶磁殊に高麗青磁の美に魅せられ、遂に店を他人に譲り、専ら作陶の研究に全財産を注入し尽し、晩年は内地に帰り作陶を楽しみつつ、芦屋の仮寓に六十一才の生涯を閉ぢた。



海井漠山作　鶴亀香爐

私の会ったのは内地に引き揚げてからの晩年で、夙川に窯を築き、専ら好きな陶器作りに余生を送っていた。ロク轤を廻し竹篦で削って形を整え、あるいは釉を塗り模様を描いたり、また土をこねる等、仲々に急しい仕事であるが、それが如何にも楽しそうであった。またただ話をしている時でも絶えず自作の茶盌を手で撫で廻していたが、それは愛着この上もないという様子であった。殊に窯開きの日などは前日から何度も穴から中の火の具合を覗いたり（この結果眼を傷め片方は失明した）期待で殆んどいても立っても居られんばかりの様子が窺われた。そして竈を開け気に入ったものができた時の喜び方、威張方、失敗した時のしょげ方は大変なものであった。特に青磁を焼くのは仲々難しいのだということで、それが会心のできで仕上った時の嬉しさは格別のものであったらしい。何事によらず創造は苦しいがまた楽しいものだという。作陶といふ創造の世界に没頭し、三昧境に入って生涯を了った義父はこの上なき幸福な人間であったというべきか。

大阪十日会で陶器特輯号発行の話を聞き、義父のことを憶い出して一文を綴った次第。

（大一二）

亀井勝一郎

私自第はこの方面の専門家ではありませんが、ながめているのは実に好きです。

私は陶磁器を「ながめる」という言葉を用いましたが、ほんとうを云うと、陶磁器は「ながめる」ものではなく、買って日常的に使用しながら「愛撫（あいぶ）する」ものです。それが陶磁器を理解する唯一の道であります。第一流の美術品ともなれば、買うことなどできないので、やむをえずながめているわけです。それでも目の保養になります。

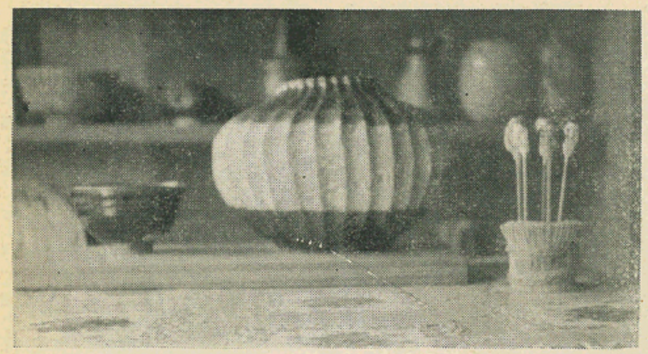
（推陳出新　北海道新聞より）

静岡民芸　賤機焼

松山龍夫

志づやしづしづはた焼に汲め清水
一　茶

陶器はずぶの素人である。静岡陶器について執筆を乞わるるままに、静岡の漆器、茶器の店「静和」で尋ねたら唯一軒焼いている家があるという。早速電話で陶芸家青島秋果さんを紹介してくれた。日曜日賤機焼を訪問、ベレー帽姿の四十代位いの志づやしづしづはた焼に汲め清水



いかにも芸術家らしい秋果さんが、心良く迎えてくれた。

奥さんが素朴な藤づるの土瓶で小さな茶碗に煎茶を入れてくれたが、とても美味しくてもう一服所望、御主人がろくろで実演、いろいろな形の品を作って説明してくれた。土は今静岡近郊では服織（はとり）という場所に出るだけ、それも殆んど絶え、他の土を混ぜて、一月に一回小さな窯で焼くだけ、作品は茶器と花瓶、今は記念品に使われる湯呑の注文に追われ手作りではもうそれで精一杯。お茶を入れてくれた土瓶と茶碗を所望したが駄目でした。列べてある作品は皆自家用でがっかり。注文を承って作りますという。一月に一回では、とても急場には間に合わない。片隅にあった湯呑を見つけ緑丘誌に出す約束があるからと無理に譲り受けた。賤機焼のパンフレットも無くただ伝統を腕で伝えるこの細々とした民芸は、元亀三年十二月遠州三方原合戦において家康公が武田勢を打破り勝利を得た時、折から節分の吉祥を祝い、太田七郎右衛門という人が、外は鬼瓦形に内は福面を画いた、七五三、三組の盃を献上、公は大いにこれを悦ばれ、嘉賞のため賤機山麓（現在浅間山と称し、リフトがある）に御朱印地二十五石と共に志づはたの号を賜った。

その後代々、駿府城、久能山東照宮、浅間神社の御用を勤め、明治大正までは三軒程あったのが、今は青島家が最後に残り、僅かに伝統を守りつづけています。世のオートメ時代、合成樹脂の時代と、心憎い程かけはなれた、このきめの粗らい素朴な花器や茶器は、世の愛陶家や茶人を心ゆくまで喜ばせてくれます。

私のごく幼なかった頃、床間の花瓶の底から水がしみ出して、家中大さわぎしたことを思い出した。正にそれが賤機焼だと思っている。今見る花瓶が同じような色をしている。急にそういう「しろもの」が欲しくなってきた、年のせいもあろう。合成樹脂の義歯では何を食べても旨くない。のどを通る、そば、ビール、それによいお茶が一番宜しい。愛好家のために住所を御紹介します。

「賤機焼」陶芸家　青島秋果
静岡市柳町九五番地
電話㊸二四八〇

バスは「西部循環」柳町停留所下車角のたばこ屋に聞けば直ぐわかります。

カメラでパチパチやったが、どうも味が出て来ない。フィルム二本つかったがお手あげでした（昭一二）

大阪陶芸教室

●<大阪陶芸教室>は京都美術大学近藤悠三教授をはじめ同教室の講師諸先生並びに在野の新進作家を加えた優秀な講師陣を擁しています。

●<大阪陶芸教室>はひねり作陶用手廻し小ロクロ，電気炉・ガス窯等等作陶指導に要する設備を完備しています。

●<大阪陶芸教室>は交通至便な大阪市内にあり（環状線福島駅より約5分）而かも寺院の境内にて閑静な作陶三昧に入るに適した環境にあります。

●<大阪陶芸教室>は趣味の向上と大阪の文化発展を念願として設立されたものであるためにあらゆる階層の男女が手軽に入会できて陶磁器一般の知識の習得と各種の造型手法の実地指導が受けられ"用"と"美"をかねた器物・置物等を製作することができます。

顧　問　京都美術大学 教授 / 日本伝統工芸会理事　近藤悠三先生
講　師　京都美術大学 講師　小山喜平先生
〃　近藤　豊先生
〃　柳原睦夫先生
〃　松田富弥先生
〃　甲本章人先生
日本伝統工芸会会員　岩渕重哉先生
〃　東　憲先生
〃　近藤　潤先生

会員募集中です申込は緑丘編集部薹目英三まで

パキスタンの(HARAPPA)(ハラッパ)出土品

佐々木嘉夫

史前二五〇〇年頃より広汎日本領土の二倍におよぶ地域に、流れに沿ひ肥土を求め炎熱を克服しつゝ展開したといはれる「インダス」文明の黎明期の「インダス」人の生活の営みは「ハラッパ」の出土品により偲ばれる。

パキスタンの「ラホール」から西南一一六哩の小駅（「モントゴメリ」より十二哩）「ハラッパ」はシンド北方の「モヘンジョダロ」と共に英領印度より分離独立した。現在も多分異教徒忌避の立場から完全埋没されたと目さるゝ都市の発堀作業を継続され、最近の「ハラッパ」現地よりの報告は小高い台地が二つに分かれ東は下街、西は城塞として建設され、城塞の内部は未だ完全には発堀されて居らぬが八百メートルを超す穀倉など発堀された事を伝えて考古学者を喜ばして居る。

「ハラッパ」現在迄の出土品は精巧な「シール」（印）テラコッタ母神像、青色粘土焼の網目刻入の腕環首飾の破片、ビーズ、コップ及び蓋苔堤樹の葉模様入りの土器破片、濃淡色の黒線模様入りの土器破片等夥しい数量に及び、現在の印パ住民の生活様式と関連して世界史の探究に新問題を提起して居る。平和な「インダス」文明の源流時代の芸術的感覚の高度を物語って居ると云える。

疎らに茂った灌木の間に些やかな煉瓦造りの国立「ハラッパ」博物館があった。日本よりの賓客のお伴をして七、八回も私が同館を訪れたのは昭和十一、十二年（一九三六―三七）の二年間の事であった。度々会へば親しくなり、印度人の気品ある館長「デシュムック」氏には「ハラッパ」先人の遺品を介して私の枯渇しかけた情操に人の世の営みの「流転無常」を説き聞かされた。其温容は南方の永く美しい夕映の内に神々しくいまなお私の目前に髣髴としている。白駒の隙を過ぎるように其後の十有余年は過ぎ去って了った「印パ」分離独立（一九四八年）という建国の犠牲は惨しくも晴天霹靂の如く国籍を異にする母国への脱出を迫られた両国民に最悪の危険を齎した。各個人の努力により、神の加護を祈りつゝ生き延びんとした脱出の途上には、お互に相噛む阿鼻叫喚の死闘が各地に展開され、両国民中に幾多の犠牲者を出した事は悲しく、惨しい事実物語であった。館長「デシュムック」氏については其後の御消息を知る由もないが、無事母国へ脱出されただろうか。今何処に安住の地を得て居らるゝだろうかと案ぜられてならぬ。館長よ、御家族と共に御多幸なれと祈念しつゝ擱筆する。（大八）

冷暖房及び管工事全般設計監督施工

日邦工業株式会社

取締役社長　井藁政市
相談役監査役　宮地邦介（大11）
大阪市西区南堀江通1丁目2番地　電話大阪（531）8461㈹～5番
出張所　堺市浜寺石津町東2丁702番地　電話堺(0722)③2642番
工場　同上

ビールジョッキの事

穴釜升夫
(札幌)

Ⓐ

昔から集蒐趣味の最後は陶器に落付くといわれております。私は陶器に関しては何等の知識もないのですが「緑丘」二十五号の「まんぴつ五人集」で、私の会社に古くからあるジョッキの事を一寸書きましたら、何か書けという強い命令がありましたので無下に御断わりも出来ず、この特集号の趣旨とは縁の遠いものとは思いましたが。私の室にあるジョッキの事を書並べて責を果たしたいと存じます。

さて日本の麦酒の歴史は僅に百年に満たない短かいものですし、何ういう訳か昔から、われわれは硝子コップで飲む習慣になっております。従って日本のジョッキ（この呼称も或いはジョッキといい、クルーグといい、またザイデルと称しますが、私にはよく判りません）の歴史は比較的新らしいもので、硝子のジョッキなどが巾をきかせて陶製のものは極く珍らしい存在になっております。

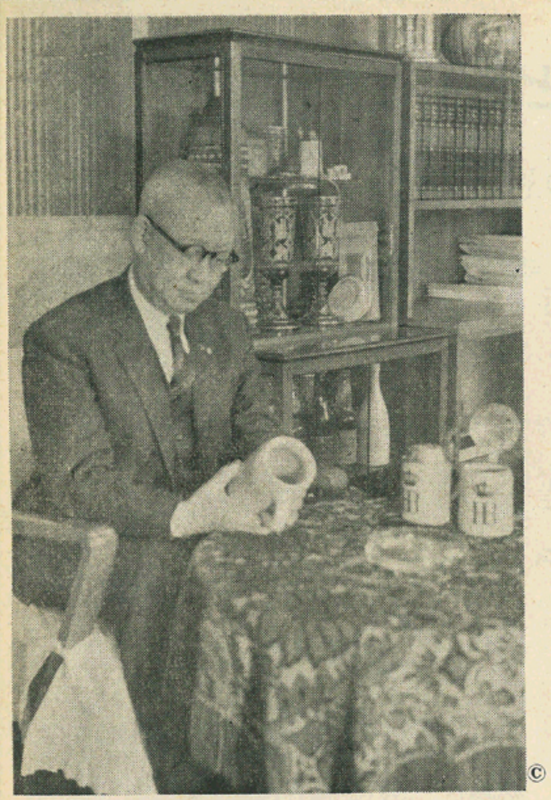
しかし、ここに陶器の麦酒壜があります。（写真Ⓒの戸棚の下段の白い徳利）これは明治の初年に東京製のものを、札幌麦酒会社が取寄せてこれに麦酒を詰めて市場に出したもので、先輩の越崎さんが当社に在社時代に発見された誠に貴重な一本であります。処で外国でも昔は陶製のものを用いたらしく、このほかに Spring Ualley Brewery (Winter Brewed Lager Beer) というレッテルを貼ったのと、レッテルは既になく僅かに壜の下部に（…… Glasgow）という字がかすかに読める小さい随円形の刻印を打ったのと二本あります。これは共に英国のものと想像されるのですが、いまとなっては一切が謎であります。

それから独乙、あるいはチエコなど北欧の麦酒愛飲国では、昔は、現在もそうであるように日本の田舎の造り酒屋のような小さい麦酒工場が地方々々に分散していて、夫々の部落を主なお得意としていたそうですが、その時代は徳利を持って買いに行ったものだそうで、陶製のバツキングで締めるようになっている壺があります。（写真Ⓐ台の上の二本）白い美しい肌の誠に雅味のあるもので、これを黙って見つめておりますと、独乙の子供達が親達のお使いで、これを持って麦酒工場目がけて走って行った情景が彷彿としてくるのであります。

其他オリムピックや色々な世界大会等で北欧へ行かれた方々から、御土産に頂いたジョッキが或いはベルリン製或いは München Spatenbräu または München Hofbräu あるいは唯単にミュンヘン等と印があるものが四、五ありますが、なかで最も美しいのは写真Ⓐの一番左にあるものであります。高さは約五十種もある渋い美しい色のもので容量は五立位を入いりましようか、これは昔独乙で装飾用にして居たものの由で今では独乙でも珍らしいものだ相であります。

Ⓑ

写真Cは前述の「まんぴつ五人集」で経緯を書いた münchen Hofbräu 社のものですが、右側の卓上の二個は、一九一一年われわれの先人が同社から頂いて来たもので、私の手に持っているものは、一九六一年に我が札幌市とミュンヘン市とが麦酒が取持つ縁で親友都市の契りを結んだ時、同社から私宛てに送って来たものであります。この同じマークの同じ会社のジョッキ二つの間に二度の世界大戦をふくめた五十年の歳月が流れている事を考えますと、極くあたりまえの事でありながら、何かしら歴史のある断面を見ているような不思議な気がいたします。駄足ではありますが、写真Ⓑの大きい方は本年二月ミュンヘンの街で求めて来たもので、小さい方は矢張り、その時オーストリーのクフ、スタインという墺独国境に近い小さい町を訪問した時、友人から頂いて来たものであります。色彩も非常に美しく、オールゴールなどを仕掛けてありますが、何となく昔のもの程味わいがないように思われます。


Ⓒ

日立商品特約店

日本電氣機器株式會社

取締役社長　天野雅司（大正15年）

本社　サクラバシ日立シヨーストール

大阪市北区曽根崎新地2丁目50番地

電話大阪（361）8871番（代表）
大阪（361）4602番（夜間専用）

近藤悠三先生（京都美大教授）と私

教えられた数々の思い出

蓁　目　英　三

樋山先輩が一四頁に〝高松の思い出―近藤悠三先生の作―の投稿がある。近藤先生のお名前が出て来たからには私も駄文を書かねばならないような衝動にかられ、筆をとった次第です。

京都清水新道の先生宅を初めて訪問したのは、いまから十数年前の、ものゝ不自由な時代であった。先生は御仕事中ではあったが前掛姿で私たちを笑顔で迎えて下さった。そして母上からいただいたというロクロを廻わして作陶のあらましを説明して下さったが、玄関を入った右手の棚の上に花生けの大きいのが（口径四〇種位）二個ならんでいるのを見た私はその呉須の素晴しさ、勢いのある山岳の図柄に胸を打たれ、ぢっと見とれていた。その時先生は私たちに十三才の時いただいたあのロクロにはこれ程の壷は大きすぎてかゝらないので、奥様と御令息とに川の中に入って貰い、タライを持ち込みロクロ代りに廻して、その花生を三本お造りになり、窯の中で一本はキレツを生じ、この二本が出来上りましたと、もの静かに語られた。

その時は冬も近く、京都加茂川の水の冷たさをじかに感じた事を今でも憶えている。川の中に入って制作にかゝった御家族挙げての御努力を思い、我々の取りたてゝなす事のない平凡な日常生活を反省させられたのもこの時であった。

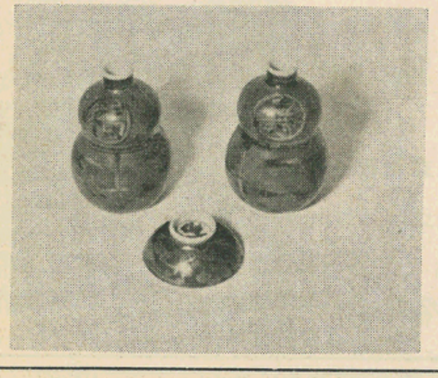
後にも先にも作陶家と親しく語る機会をもち、今日もなお文通させていただいている先生は近藤先生唯一人である。

先生の許をお訪ねした時何か一つ書いて見ませんか、あとから上釉を塗って窯に入れますからと先生のお造りになった、お銚子とぐいのみに「酒と女は気のくすりさ」と小唄の文句を書いたものだ。出来上った作品は毎日晩酌に使わせていただいている。一本に一合三勺ははいる。

先生がお作りの作品は満足した作品でないと全部壊しますので困りますと、ものゝ不自由な時に奥様が語られた事があるが、決して妥協しない本来の気性が日本伝統工芸会の第一人者になられたゆえんであろう。私たちも亦仕事の鬼になる心を教えられたのはその時である。

或る時東原透君（昭一八）が近藤先生の作品がそんなに好きですか、父（故東原円吾氏―大八）が近藤先生の作品を好んで集めていましたからといって二寸小皿を五枚下さった。誠に珍らしい文様で昭和初期の作品でないだろうか。家宝として大切に仕舞い込んでいる。

或る年先生から真赤なお銚子をいただいた。青呉須で、丸に福康寿と染付の誠におめでたい文様である。真夏の夕（女房・子供が夏休を利用して北海道へ旅行していた時で）男やもめであった私は、チリンチリンならして来た豆腐屋から豆腐を一丁買い、冷やっこで一杯やる計画をたてた。ネギをきざみ、削節をかけて



用意した。先生からさきにいただいた梅文様の白い皿にはノリとウニとキュリを盛り付け、座敷の真中にテ

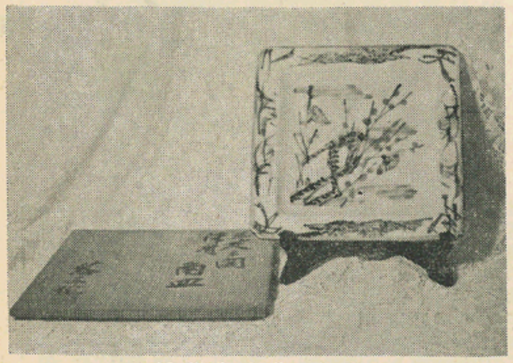
赤いテーブルを持ち出してレースのテーブルセンターをかけて料理を運んだ。

再び台所に立って先生からいただいた赤呉須のお銚子に酒を注いでトロ火でカンをした。これで準備万端整い、心豊かに庭に下り、芝生にホースで撒水をはじめた。

空は間もなく茜にそまり、撒水も終って赤呉須のお銚子と、盃を両手に持って座敷に坐った。

酒飲みというものは酒だけあればコップで梅干しでよいのだというが夕ぐれに打水の、すだれを通して流れて来る涼風に浴衣の胸をあけてチビリとやる気持はそこに食器の美があればこそで、また格別である。酒も酒であるが盃の愛らしさ、銚子のにぎりの程のよさ、これまた知る人ぞ知るである。全く楽しい一夜であった。

その年の秋、先生にその時の事を話した事がある。先生は私の話を聞くなり、こうして五つ並べて御覧なさいと呉須の盃を伏せて五ツ円形に並べられた。配色がよいでしようと云われて無造作に新聞紙に包み、それを私に下さった。この名作は何れもお正月と誕生日には欠かさず出して楽しんで居る。



近藤先生作　角皿

何時だったか先生に、私は墨の字を上手になる事が一番の親孝行と思って、四十の手習いをはじめましたが、自分の名前が一番苦手ですと申上げましたら、先生は私の字はお家流ですが、名前を書く時は下の三の字を大き目に書いたらバランスがとれますよと名前を書く要領を親切に教えて下さった。それからというものは英三の三を書く度に近藤先生の温いお顔を思い浮べるのである。

今度大阪に陶芸教室が出来た。近藤先生が顧問となられ、沢山の京都美大の先生を投入しておられる。私も「緑丘」の編集と発送が終ると日曜日の午前は絵を描いて、絵具のついた手で、午後はそのままの姿で、この教室に走る。ものゝ本には「土を知り、業を知り、釉の味を知り、形を汲み云々」とあるが土も知らず業も知らず、唯黙々と土と斗う、ものになるのは何時の日であろう。

作陶三昧と人はいう。学生時代の三年間の坐禅に似たものを今こゝで味っている。

（昭一一）

正面向　陶芸教室の筆者

広告お願い

一回（一頁全段）一二、〇〇〇円
一回（1/2　段）六、〇〇〇円
一回（1/4　段）三、〇〇〇円

年間契約は特に割安にいたします。
代金支払は誌上掲載後で結構です。
【広告原稿】は必らず白黒で願います。色彩原稿はもう一度トレースしなければなりませんのでお送りになりませんように。

まんぴつ五人集

次回

近藤徳弥（大一五）
小貫武（昭二）
山村太兵衛（昭一二）
沢井道成（昭一四）
木村頼雄（昭一一）

同期生・交歓

白木一郎（東京支部）

先日文芸春秋の同期生交歓という名目で呼出しを受けたので出席してみると、小樽高商時代の同級生七名の集りであった。大正も最後の卒業生だったわれわれの学校を出た頃は現在とは異り、大学は出たけれど……の時代で、地方高商出身者にとり就職は決して楽なものではなかった。出来れば大学にでも入り三年後によい務め先を探そうという考えもあって、一橋、東北大、九州大と受験する仲間も多かった。七名のうち五名は就職引き延し組である。

集ったメンバーには学者グループとして一橋大学の大平善梧君と広島大学の中野清一君という有名教授、芝浦製作所の西野嘉一郎君は大学で講義をしたり、新聞雑誌で経営学会計学の健筆をふるっているので、彼もまたこの学者グループに入ってよかろう。産業界では東海電極の竹内専務、朝日ビールの近藤専務、銀行出身としては東京銀行前常務の津久井君と三菱銀行前常務の筆者というのが今回の組合せである。この取組みの責任者は誰か知らないけれども小樽時代からの最も親しい面々であってみれば全く遠慮を必要としない交歓であった。

銀行員というのは籠の鳥みたいな生活であって幹部になっても仲々外出のできにくい環境にあり、同窓の会合なぞにも欠席がちになり、欠席が出不精をさそい、緑丘関係の会合には残念ながら殆んど出ていない。ただし同級の会には万障繰合わせて出てきたのが、せめてもの慰めとしている。

例の七名の内、大平君とは一橋時代から特に親しく、戦争末期には上海にも一緒におり、お互に萩窪に居を定めた関係で、長らく来往してきた。津久井君とは同業である外、上海、大阪で生活を共にした。近藤、竹内両君とは取引関係でも時々旧交を温めていたが、問題は中野君である。小樽時代から最も尊敬した一人彼は高田保馬先生をしたい九州大学に行き、その後三十八年間文通もし電話で声もききながら卒業後初めての対面。津井君も初めてとか、まことになつかしいことであった。

語るは大正十二年から三年間の小樽高商時代のこと、その中の一つが軍事教練問題。御存知の方々も尠かろうが、当時軍から派遣されていた軍教々官の鈴木という中佐の方の作った演習想定の中に出てくる〝不逞鮮人の来襲〟という字句が問題となって起った事件であった。その二三カ月後には中央に飛火して早稲田大学の軍教問題にまで発展した、という曰くつきの昔話である。続いては旧師旧友の思い出や近況報告、だんだん話は伜や孫のことに及ぶと、そろそろわれわれも前時代の人間になったのか、と少々淋しくなってきた。現存の同級知友でもこの会合に当然出席さるべき人々も多いが、就中惜しまれるのは、早大の教授でいよいよ円熟味を加えて来られた故杉山清君、野田醤油に居られた伊藤英夫君のことである。共に生きておればこの会合の立役者であったろうに。

籠の鳥から出て人生第二の仕事に就いたのを機会に今後はなるべく小樽関係の会には出るつもりになった。三菱銀行におった当時も日興証券に入った現在でも社内の緑会には長老として出席をかかしたことはない。この点で御ゆるしが願いたい。

次回は近藤徳弥さんにお願いします。

（大一五　日興証券投資信託委託会社）

奴さん

堂城不二人（大阪支部）

大正十五年私が三年生の時母校の山上グランド完成祝賀運動会が、小樽花園公園で開催されることになった。当時小樽高商の運動会は小樽名物の一つとして市民の楽しみでもあった。

運動会の催し物の一つとして私の組からはどうした理由だったかは忘れてしまったが「奴さん」をやることに決った。この「奴さん」の指導者として武内武一君、私その他一、二名が指名された。私達は毎日放課後に学生の下宿先（片寄録郎君）である東雲町の芸者さん宅（当時の学生はこんな粋な所に下宿して居ったものです）に通って「チンレンチンレン」の手解きを受けて翌日その成果を昼食時に現在の柔剣道場に学生連と道場の中央に輪になって手振り足振りよろしく御指導の責を果たした次第で誠にほほ笑ましい光景であった。

ある日浜さんの時間に浜さんから「この組ではこの度の運動会の催し物に「奴さん」とかをやるそうだがどんな物か一つここで見せて貰いたい」との申入を受けて（当日私は幸にも欠席した）武内武一君が止むなく勇を鼓して教壇上で自らの口三味線で「エ、奴さん」を踊ってご覧に入れた処、その程度ならと御許しがあったと翌日その報らせを受けて私は武内君の苦衷の程をお察し申し上げるとともに冷汗の出る思をしたが正に開校以来の珍事とも申すべきであったと思う。

運動会当日の出し物「奴さん」は同じ揃いの奴さん姿に身を扮し楽隊を先頭に場内を一周して観客の目を見張らせ、次いで妙なる「奴さん」のメロデーに合せて手拍子よろしく「奴さん」をそうして「姉さん」を踊り抜いて万場の爆笑拍手裡に幕を閉ぢたのは楽しい想出の一つでもある。

私は卒業数日後、小樽の北海製缶に就職した翌日にこの「奴さん」の慰労会の未払金の集金に丸髷姿の料理屋の女中連に会社に押しかけられ全く顔から火の出る思いをしたことがあった。今でも同窓会の会合には私は「奴さん」を強要せられて閉口している。

次は小貫武君に御願いします。

（昭二　東缶倉庫株式会社社長）

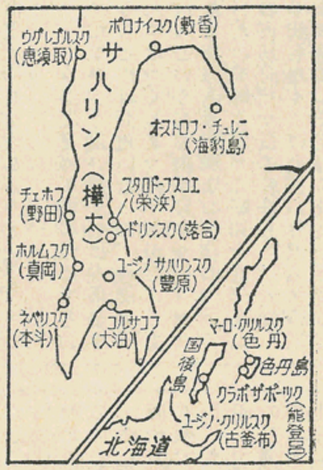
コルサコフの男

岡田保司（大阪支部）

故郷のない人は居ないであろうが私と同じように樺太の生れというのは、今や樺太がソ聯の領土となっては、お国はどちらですかと問われると、はいソ聯ですということになるのであろうか。

小学校は大泊の小学校で、中等学校は庁商（今の緑陵高校）である。私の先輩にも、後輩にもソ聯製の小樽高商や小樽商大卒が居ると思うので、母国の地名を紹介したい。

実は、つい最近まで全然知らなかったのであるが、「道新」にチラリと樺太の地図を見付けたので、なつかしくながめた。



樺太（サハリン）大泊（コルサコフ）本斗（ネベリスク）真岡（ホルムスク）野田（チエホフ）恵須取（ウグレゴルスク）敷香（ポロナイスク）海豹島（オーストロフ・チユレニ）栄浜（スタロードフスコエ）落合（ドリンスク）豊原（ユージノサハリンスク）とある。

私は、コルサコフの男になっている。この調子では名前まで○○スキーになっているのではないかとも思って見た。

次は京都の山村さんお願いします。

（昭一二　郡是製絲株式会社）

私と小唄

尾崎哲平（東京支部）

私は満拓生活、戦争を経て、二十二年暮ソ聯から帰還、その後間もなく当時の食糧配給公団本部に勤めるようになり、二十六年公団解体後も、引続き全糧連から社団法人全国食糧信用協会「食信協」へと、一貫して食糧（主として米穀）関係の全国団体の仕事に従事して参りました。

食信協というのは、一口に言いますと、全国に三五〇程ある米穀卸業者が、銀行から融資を受ける際、その保証を行う機関で、現在基金二〇億円を以て、ザット八〇億円の保証を行なっています。

全国団体の本部に居ります為、地方に出掛ける機会が多く、友人によく羨やましがられますが、これがマア私達の商売なのです。

東京ではさほどでもありませんが地方ですと宴席の際、必ずといってよい程「東京の方、何かお一つ」と芸を所望されます。実はこの稼業もう十五年以上になりますが、私にはこれが長い間苦手でした。

生来、歌舞音曲は不得手で――もっとも日本人は九割まで音痴だそうです。また私の体験ですと学校をやった人程歌は下手なようですが――そんな時いつも切羽詰って、調子外れの民謡や、果ては寮歌、軍歌まで引張り出して、その場を繕ってきましたが、どうにも格好がつかない。何とか壁を破りたいものだと常々考えておりました。

偶々一昨年夏、何か内輪の会食の際だったと思います。会社の後輩で自他共に認めている音痴居士が、自ら小唄を歌ったのです。しかも結構きけました。人知れず既に一年近くやってきたとのこと。私も迂濶でしたが、改めて彼を見直した次第です。サア「これなる哉」もう考えることはない。いままで小唄等別世界の人のやることとばかり信じていた私も、その場で決心し、躊躇することなく入門に踏み切ったわけです。

だが、最初は仲々ついて行けませんでした。何とか人前でやれるようになったのは、半年も経ってからです。――皆んなそうらしいです。その頃お師匠さん（流儀は春日）に、「貴方は一カ月ともたないと思いましたよ。克く辛抱しましたね。しか

しこれからが大変なんですよ」とよくいわれたものです。

勿論上達に早い遅いはあります。しかし早い人が上手かというと必ずしもそうではない。人にはそれぞれ流儀があります。初めうまく行かなくとも、悲観するには当りません。私は小樽時代、球撞きと麻雀に凝りましたが、初めどうかと思った球の方が却ってものになったような気がします。然し、物事を始めるのは、早ければ早い程良いということはいえましょう。

近頃では、週二回の稽古も一向苦にならなく、宴席にも楽な気持で臨んでいます。こんなことを書き並べてますと、随分暇があり、いい加減な日常を送っているように思われますが、全国団体の仕事というのは、それは大変なものです。

ただこのような道（芸事）についても、先輩諸兄の御指導を仰ぎたいという気持と、高嶺の花ではないということです。

次回は、寮友沢井道成君にお願いすることに致しました。

（昭一四　全国食糧信用協会）

人生ジグザグコース

小林啓作（小樽支部）

親父が回漕店を経営していた関係で生れ落ちるから海と船に密着した環境に育ち在学当時は久木先生の海運論や海上保険論をカジリ将来は船会社に就職して最初はパーサーを振り出しに海運界に身を投じようと志していた。

ところが海運界不況のためでもあったが事志と違い海と船に関係のあることには間違いないが、税関の役人になってしまった。しかしどうも役人というのは虫が好かない。たまたま外国為替管理法の事務についていたのが縁となって昭和十五年東京の貿易商社々員に転身した。入社して間もなくこの会社が外国為替管理法に違反して上海に資金を蓄積していることがわかってきた。いままでその方面の取締監督をしていた自分が今度は法網をくぐる仕事をしなければならない。年も若かったし正義感もあったのですっかりジレンマに落入ってしまった。遂に意を決して退社し都落ちにも程度があるが、北海道は根室の海産会社々員になってしまった。だが根室も安住の地ではなく働き甲斐のない毎日を送っている中に病を得てしまった。

昭和十七年約半年の病院生活を終えてとうとう生れ故郷の小樽に七年振りで舞い戻り、先輩の計理士増成悌司先生の事務所の居候のようなことをしていたが、増成先輩の死去のため今度は函館ドック小樽分工場の会計嘱託になった。その中に遂に敗戦を迎えこの工場も廃止の運命となった。

昭和二十年十月意を決して計理士事務所を独立開業し、爾来税務代理士、そうして税理士として漸く自分の生きる道を見出したのである。在学時代から珠算、簿記、会計学等は大嫌いで会計屋になろうなどとは夢にも思わなかったのに、その一番嫌いな仕事でオマンマを食うようになったのだから全く世の中は皮肉なものである。

然し考えてみると最初の志望通り商船のパーサーをしておれば、あの大戦で海の藻屑となっていたであろう。また貿易商社々員として東京に頑張っていたならば私の住居は当時の三鷹村であったから空襲で親子諸共おさらばしていたかも知れない。根室にいても私の住んでいた平内町や会社のあった本町は空襲を受けたのだから同然だっただろう。何かしら目に見えない糸にたぐられている自分の運命を不思議に感ずるのである。簡閲点呼も三回受けたがとうとう召集令状は来なかった。

人生五十年化転の中に比ぶれば夢幻の如くなりで五人の子供ができ、長男は一昨年大学を卒業して自分の好きな道を選んで東京の著名な写真館に職を見つけて安月給ながら満足しているようである。長女は昨年短大を卒業してこれまた自分で選んだNHK札幌支局の音楽資料室に勤め日本薄謝協会のサラリーの安さをぼやいている。二男は矢張り好きな道を選んで大学入学を嫌いテレビの技術学校に入った。二女は高校一年、末娘は中学一年、後十年位で親の責任も果たせそうである。せめて子供達には私のようなジグザグ人生を味わせたくないと思うが、さてどちらが幸福であるかは人生の終焉を迎えなければわからぬことである。

町の商人を相手に税金の用心棒をしている中に町会長にさせられてしまい、その延長で市議会議員になってしまった。残された人生がどのように展開されて行くか見当がつかないが、運命のサイの目の出るままに身を処して行く積りであるし卒業以来二十八年間曲折は多かったが、オマンマを食うのには聊かも困らなかったから将来もなんとかなるだろうと楽観している。また六年前に生死の境に立つような病気をしたので別段命を惜しいとは思わない。従って肺ガン等も恐ろしいとは思わないからバク〳〵煙草ものむし酒も毎晩かかさず楽しんでいる。興到れば新内のレコードを聞いて陶然とし人生を味わい直している。

ただ面白くないのは現代の軽佻浮薄な世相と誤れる民主主義の跋こである。日本民族本来の誇りと自覚が確立されるのを見ておさらばをしたいものと念願している。

次は木村頼雄君にバトンを渡します。

（昭一一　小樽市議会議員）

まんぴつ執筆者はどうしても原稿が遅れ勝ちですので、次回は十月二十日のメ切をお忘れなく、ご協力のほどを願います。

今回のまんぴつ執筆者中斎藤丈一氏は病臥中で筆もとれない状態との奥様の手紙で岡田保司氏がピンチヒッターとして立って下さいました。

新潟震災お見舞御札

高杉隆平（昭一三）

御見舞のお便り有難く拝見致しました。居宅及び営業所等地割、地下水噴出等により所々半壊程度の被害を受け目下修理中です。しかし家を残して避難するという程のことはありませんでした。商売上は冷蔵庫及び倉庫保管の商品を駄目にし（保険ききません）これから何年間かでこの損失を稼ぎ出すこととなりますが、同業者いずれも同じような条件ですのでへこたれることなく頑張っておりますから何卒御休心下さい。

山陰水害お見舞御礼

富永友延（大一二）

この度の当地の水害については早速御見舞状を頂き有難うございます。御厚意深く感謝いたします。当地方の水害は想像以上にひどかったのですが、拙宅は御蔭様で何等の被害もなく、平穏無事に過しましたから何卒御安心下さい。山間部や農村の惨害には目を覆うものがあり、お気の毒にたえません。一日も早く復興されますよう祈っております。当市内でも家屋への浸水は相当数にのぼり、天災の悲惨をまざまざと見せつけられ、防災施設の緊要なことを痛感させられました。

山里豊（昭三）

水害見舞早速下さいまして誠に有難く感謝しています。厚く御礼申上げます。今度の豪雨は島根県が中心らしく、幸に米子市は床上浸水が相当数あった程度で殊に小生の宅は高台にありますので、浸水もなく建物の被害もなく無事でございましたから御休心下さい。

若林周五郎（大一二）

今般の集中豪雨の当地方被害に対し早速御見舞状頂き厚く御礼申上げます。御蔭様で当地は被害を免れましたので御休心下さいませ。出雲地区並に鳥取県西部地区は被害甚大の様子にて気の毒な次第です。先は乍略儀御礼申し上げます。

山田善之助（昭九）

この度の豪雨に際し早速に御見舞賜り厚く御礼申し上げます。夜の十二時頃から突然ものすごい風と滝のような雨になり一時はどのようになるかと心配したのですが、この風雨は四時間位で明方と共に小降りとなり、湖水の水もあと十糎位で水害になる処で除々に減水、雨もり程度のことで被害皆無、平常通り営業させて頂いております。中心が西の方、米子松江に移り鳥取県西部、島根県が甚大な被害を出した次第です。私共東郷温泉では山陰線が米子以西に不通の箇所を出したためと新聞、ラジオテレビの報道が禍してお客の予約取消相次いでこれになやまされていますが、水害による直接被害の皆無は本当に幸いでした。

興國人絹パルプ株式會社

発酵化成品事業部　事業部長　横山為祐（昭12）

KRNA　精製リボ核酸……医薬品，試薬，工業薬品原料
粗製リボ核酸…調味料，医薬，試薬，工業薬品原料

核酸関連物質…ヌクレオタイド，ヌクレオサイド

医薬用興人酵母・医薬用ビタミン強化興人酵母
……医薬用バルク，食用，抗生物資培養基用

KR酵母……動物医薬用，養魚餌料用，家畜飼料用，一般飼料用

グリーン酵母……植物成長促進用

緑丘余話

加茂儀一学長

日本科学史学会会長に推さる

日本科学史学会の前会長は三枝博音氏であったが、不幸今春横須賀線の大衝突事故に遇って不慮の死を遂げたため、其後任会長について考慮中であったが、小樽商大加茂学長が推されて会長に就任された。

四年前から計画をたてた「日本科学史大系」の発刊完成こそ当面の事業であり、ただにわが国のためのものでなく、世界のためにも、この完成に十分の責任を感じ、前会長の遺志をつぎ、努力する覚悟であると。

（三〇頁参照）

札幌ゴルフ トーナメント

GOLFを通じて札幌、小樽の緑丘人の親睦行事が札幌側の世話役で昨年来次第に盛況となった。いまでは札、樽は経済同一市内と称せらるるにも拘らず両市民の交流、親睦は必ずしも順調ではないが、この緑丘GOLF同人こそはまことに同窓生として、卒先この実を挙げているので喜ばしき限りである。益々会も重ねるにつれて盛んになるきざしが見られる。

最近のトーナメントの成績は

一、八月一日（土）島松コース十八ホールス・メダルプレー

一、参加者十八名

一、成績

（註優勝鎌田氏のスコアは驚異的記録）

			グロス	ハンデ	ネット
1	鎌田	（湯浅貿易 支店長）	84	23	61
2	加藤	（中央バス 常務）	99	26	73
3	杉江	（中央バス 専務）	100	26	74
4	瀬尾	（税務会計）	104	28	76
5	山本	（樽・倉）	101	23	78
6	遊佐	（ローヤル ホテル専務）	101	21	80
B.B	坂井	（三馬ゴム）	115	28	87

緑丘通信

続いてホールイン・ワン

去る六月十三日同期の四人（昭和八年卒）岩崎（ハンデ17）と、横山秀男（ハンデ10）名雲賢（ハンデ17）池田友義（ハンデ30）で札幌輪厚コースを廻りましたが、三番ショートホールで横山君が見事ホールインワンをやりました。なお横山君は過去にも安孫子の十五番で、矢張りホールインワンの経験の持主。一度でも稀少なのに、二度とは全く恐れいりました。

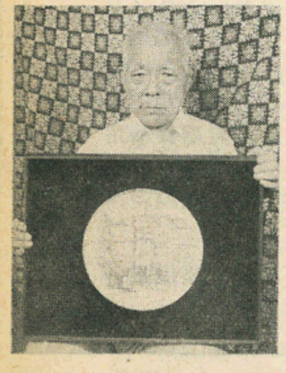
（岩崎記）

☆広島支部主催になる緑丘会中国西国大会は十一月七日（土）に決定しましたので、緑丘人多数の参加を希望する。

☆文芸春秋九月号グラビヤ頁「同級生交歓」は緑丘大正十五年卒七人の侍（大平善梧、竹内隆、中野清一、白木小一郎、近藤徳弥、西野嘉一郎）を扱う。この頁は昨年の大十四年に続いて緑丘人は二回目である。

☆小樽商大人文科学研究室は紀要〝人文研究〟の二十八集を発行。浜林正夫教授の〝イギリス革命における宗教的寛容の問題、高嶋稔助手の英語複合母音の解釈と表現の問題点〟など八編がA5判活版印刷二百ページに盛られている。定価二〇〇円

☆室谷賢治郎元教授は停年退職後小樽商大短期大学教授として引き続き教壇に立っておられたが、この度所望されて札幌短大学長に就任される事となる。正式辞令十一月の予定



☆元教授南亮三郎先生は胆嚢炎で入院、手術も無事終り、自宅で静養中。

☆小林多喜二碑建設については既報（三八号）の通りであるが今回建設期成会結成、小樽市長安達与五郎氏、母校学長加茂儀一氏、作家江口渙氏、友人蒔田栄一氏が発起人代表、事務局長に浜林正夫氏らが夫々就任した。

建設費の募金目標三百万五十円。なお発起人には伊藤整、片岡亮一、岡田春夫、松尾教授等の緑丘関係者をはじめ、古在由重、平野義太郎、除村吉太郎、志賀直哉、石川達三、亀井勝一郎、阿部知二、高見順、広津和郎、壺田繁治、山本安英、関鑑子、本郷新等学者、文学者、芸能人彫刻家等一〇〇余名が参加している

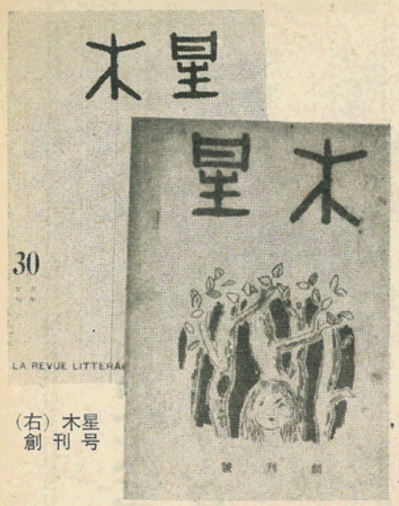
☆日本大学板橋病院に入院、胃五分の三切除手術をした板垣与一氏（昭四）は六月二十日無事退院、静養中。

☆大阪支部四谷宗義氏（大一一）は大阪における墓目英三油絵個展に出陳された母校正門陶額を譲り受けこのたび額装出来上って、失われ行く母校の正門を永久に残し度いとの念願から母校へ寄贈された。

季刊同人誌

木星30号記念特集

札幌から発刊



（右）木星創刊号

季刊「木星」三〇号の記念特集が札幌から発刊された。「木星」は昭和十七年九月創刊であり、緑丘同人詩集である。

編集は小梁川重彦氏（昭一〇）、発行は坂井昇三氏（昭一〇）である。

記念特集への緑丘人の執筆は、和田徹三（昭六）小梁川重彦、坂井昇三（昭一〇）笹部幹雄（昭一六）久保直人（昭一六）三谷晃一（昭一七）等のベテランが揃っている。中でも坂井昇三氏の「木星創刊のころ」は新藤（故人）笹部、小梁川等四人のよきパートナーで船出した若き日の思い出を綴る。

三谷晃一氏は二人の詩人と題して故新藤康人、笹部幹雄両先輩を賞讃、いつになっても僕の先輩で到底ぬきでることのできないものを感じたと、詩を通じての美わしい緑丘人の敬愛の情を披歴する。和田徹三氏も「木星二十年の回顧」を執筆、同人の紹介と賞讃をおしまず十四頁に亘る木星雑記は「木星」の生い立ちを余すところなく語る。創刊号は厚手の白モゾウ紙を表紙に国松登のデッサン、内容は詩―三原邑「手紙一篇」、笹部幹雄「喪服七章」、坂井一郎「病窓賦五章」、小柳透「静かな詩ほか四篇」。飜訳詩―W・B・イエイツ笹部幹雄訳「さまようイインガスの歌」、R・M・リルケ小柳透訳「寂寥」。

小説―新藤康人「雪虫」石川清「歌うたふ魚」（執筆者は全員小樽高商出身者）

このどっしり手ごたえのある「木星」は、その新鮮な知性かがやく作品と相俟って道内はもとより、中央から絶讃の拍手をもって迎えられ、三〇〇部刊行が、またたくまに売れたと語る。

「昏迷の夜を突き抜けた美しい午前」に発展し、全日本詩壇の注視の的となる日も近いであろう。

木星年表

No.1（昭、一七・九）―
No.4（昭一八・九）戦争激化に伴い発行不能となり、昭一八以降休刊
No.5（昭二一、四）―
No.16（昭二七・一）坂井氏転勤、長期療養により昭二七以降休刊
No.17（昭三一・一〇）―
No.29（昭三七・一）坂井氏病気回復、札幌へ転勤により昭三一・一〇より復刊、今日（No.30）に到る

第一次木星　和田徹三（昭六）、坂井昇三（昭一〇）、小梁川重彦（昭一〇）

第二次木星　笹部幹雄（昭一六）、久保直人（昭一六）、三谷晃一（昭一七）、坂井昇三（昭一〇）、小梁川重彦（昭一〇）、新藤康人（昭一六後）、永峰益人（昭一六後）、笹部幹雄（昭一六）、石川清（昭一六後）、見方勝（昭一五）、渡辺駅郎（昭一六後）、太田久従（昭二〇）、佐藤敏夫（昭一七）、尾川正路（昭一七）

第三次木星　桜庭三郎（昭一〇）、坂井昇三（昭一〇）、小梁川重彦（昭一〇）、小笠原邑（市原政美）（昭一一）、笠原真（昭一六後）、原康夫（昭一一）、三原邑（昭一一）、三幸雄（昭一一）、一郎（昭一一）、和田徹三（昭一一）

発行所変遷　No.1―No.6 小樽市　No.7―No.30 札幌市

木星同人　作品発表者

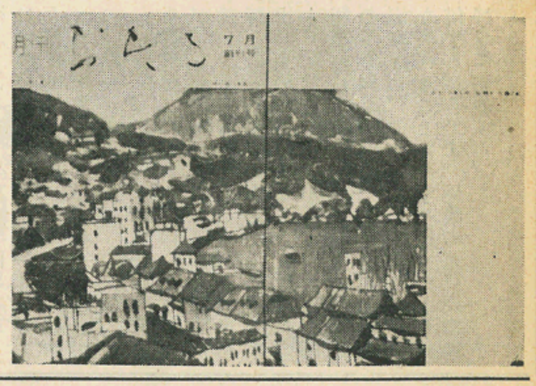
〝おたる〟創刊

「酒」「あまから」等のPR誌から「きょうと」「神戸っ子」のような観光や商店街のPR誌など最近の出版界のなかにあって特異の存在で確実な読者層をねらって出版されたPR誌が多い。

この月刊「をたる」も七月市内名店街の人々によって創刊された。ふる里の本と副題が付いている。

例によって松尾正路、越崎宗一、小柳透の三氏の名前が目を引く。

随筆で有名な松尾正路先生は上から見た小樽と題して、地獄坂から書き出して、小樽の個性は変化と立体感の与える親しみのなかにあると、そして貨物船と大学、燈台とカツコウ、多喜二と伊藤整、それが小樽のおもしろさであると、第二のふるさとを遠くはなれたわれわれにはなつかしさを呼びおこす。越崎宗一氏は郷土史家として野口雨情と啄木の小樽での回合（小樽日報に入社）や両詩人が若き日に、郷土小樽を舞台として活躍した事を三頁にまとめておもしろい。小梁川重彦氏（小柳透）は札幌図書館長であるが、むしろ詩人として有名。彼は幼い頃、小樽港に軍艦が入港し、それを見物に行った思い出を書いている。なかに出て来る手宮の山に「〇キャンデー」と「酒はキ印」の大きな文字が小樽に生活したものには特に印象深い。



日本科学技術史大系刊行の意義

学長　加茂儀一

日本科学史学会編の「日本科学技術史大系」の刊行にあたって、特に「緑丘」編集長葊目英三氏から、その刊行の意図について何か書くようにとの御依頼を受けましたことを私は光栄に思い、その御好意に対して万腔の敬意を表する次第であります。

同氏が態々この大系のため貴重な誌面を割いてくださることについては、単に私が、その学会の会長であるためではなく、この「大系」自体の刊行の意義の重大さを認識されてのことであろうと私は信じるものであります。

科学技術の振興が国策と叫ばれ、いまや日本経済の高度の成長は世界の驚異とさえなっていますが、その成長の根底をなすものは日本の科学技術の進歩であります。処が日本は明治以来外来の文明の模倣にもとづいて、その繁栄をかち得たというのが日本人自身の考え方であるばかりでなく、世界の識者もまたそのような定説を立てております。事実また日本の産業界自体も、このことを自明のこととして認めております。

果たしてそうであるとすれば、現在の日本の成長振りが何時までも外国のあとを追うことにならざるを得ないことは必定であります。このことは日本の将来にとって憂うべきことであります。私は現在の日本が高度の成長振りに酔っているとき、この事態を十分に反省し、日本の科学技術を世界の水準に発展させるだけでなく、日本人自身の創意によって世界的水準を上廻わるだけの科学技術を自らつくり出さなくてはならないことを痛感します。

処で現在世界的驚異といわれている日本の産業、経済の発展の基礎たる科学技術の進歩は、元来欧米の模倣によるとはいえ、日本人の手によってなしとげられたものであることは確かである。これは明治初年以来一世紀の間の日本人の知力と生産力との絶ゆまざる努力の蓄積の結果であることは事実であります。この点に鑑みてわれわれが日本人の過去の業績を回顧し反省して、そこに科学技術の領域における日本人の能力を発見することが今こそ必要であると私は考えます。それは今後の日本の発展にとって重要な足掛りとなるからであります。そして、この事実を確めることが、われわれ科学技術史家の任務であります。

従来の歴史は政治、経済、文学、芸術、宗教などの歴史でありまして、科学技術の歴史は全く無視されておりました。私がいまから三十年前に技術史をやり始めた当時、日本の学者は技術史は人間を対象にしないからといって、私を馬鹿にしたものです。いまのこの学問の発展振りを見ると全く今昔の感に堪えません。

それは別として、私たちの日本科学史学会は一世紀に亘る日本の科学技術の発展のあとを探るという大事業に着手し、五年前から全国の大学研究所などの科学技術史家を動員して、今や散逸または消滅しかかっている文献の調査をやりました。そして、その文献の集録と解説だけで二十六巻という大部なものになりました。

この仕事と、その出版とは、その重要性と膨大さから見て本来は国家がやるべきものであると私は考えますが、大学に科学技術史の講座さえない現状ですから、それは望むべくもありません。日本科学史学会が自らこの事業の達成を意図せざるを得なかった事情はここにあります。ことに日本科学史学会は、国際的な学会であり、この事業の成否は世界の学界の注目のまとであり、そして、また全世界の技術史を取扱った大冊のものは英国のオックスフォード大学その他でも刊行されておりますが一国だけの科学技術史二六巻の編集は世界史上始めてのものであり、それだけにこの事業の完成は国の面目にもかかわるものであります。

幸いこの事業が発表されるや、国立国会図書館長鈴木隆夫氏は、この事業を昭和の科学「日本書紀」と絶讃され、その他三笠宮を始め、日本商工会議所会頭足立正氏、時の通産大臣福田一氏、同東大総長茅誠司氏同文部大臣灘尾弘吉氏、同科学技術庁長官佐藤栄作氏、日本科学技術振興財団会長、日立製作所会長倉田主税氏、日本学士院院長柴田雄次氏、日本学術会議会長朝永振一郎氏、京大教授湯川秀樹氏、東大名誉教授坂本太郎氏らからは早速推せんと礼讃の言葉を頂きました。

しかし、この仕事の意義は一般にまだ理解されているとはいえませんが、この事業の達成は是が非でも実現しなくてはなりません。それは私がこの事業の主体者である日本科学史学会の会長であることだけではなく、私たちの子孫が明治、大正、昭和を通じての日本の科学技術の発展の姿を知ることが、彼らが祖国の理解を深め、それによって彼らの自覚を高めることに必ずや役立つと私は信ずるからです。最後に葊目氏の御好意に感謝する。

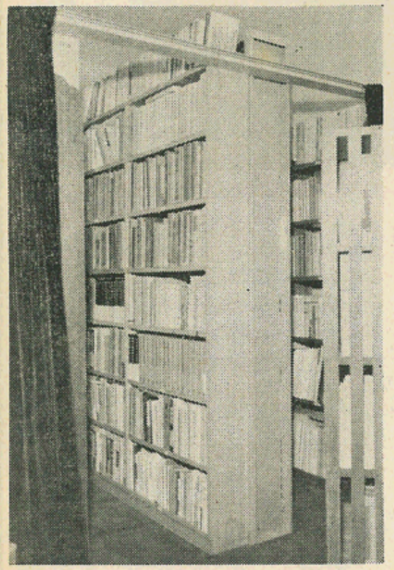
僕の書斎

西野嘉一郎 (大15)

僕の書斎は七坪位もあるが、応接室の中に机と書庫とを同居させているので広いようでせまい。苦心したのは同居している書庫である。古い本や色々な書類、雑誌が整理しても整理しても雑然とするので、何とか室の感じを乱さないようにするため三畳あまりのスペースをカーテンで仕切って、そこに奥行一間半、高さは天井につく位の書棚を四本いれてある。この四本の書棚でも書物、雑誌、書類が入りきらなくなるので一年に一回位は古いものは物置に移したり、屑屋に売りとばしたりして整理しているので、どうにか間にあっている。さらに僕の書斎で自慢のできるのは四段四面の廻転書架が机のすぐ後に作られてあることである。

書物や書類も相当量入るし、うしろをむけば必要なものがとれるので原稿等を書くときには、すこぶる便利である。皆さんの書斎におすすめしたい。

僕の書斎には学者の書斎のように自慢できるような古書は一冊もないが、会計、経営に関する書物だけは一応古いものから新しいものまであつまっているつもりである。特に「経営分析」に関する内外の文献だけはどうにか蒐集してある。J. H. Bliss, A Wall, S. Gilman 等の原書は私には思出の深い書物である。



さらに三菱経済研究所、日本銀行統計局、日本興業銀行調査部等の好意で、発行毎に寄贈されている我国経営分析の統計資料だけは整理し、保存しているが、これが相当数になっている。

また政府の委員をしている関係上最近では所得倍増計画、行政、税制国鉄等々の関係資料がこの書庫のなかに加はっていることである。経営会計に関する学術雑誌も幾種類か二カ年位は書架に整理され、古いものは屑屋に売却することにしているが雑誌「会計」だけは昭和二年から四十年間位のものが物置に保存してある。自分でも何のため保存しているのかわからない。

なお幾冊かの私の著書が一棚に出版事項に配列してあるので、時々この書庫のなかに入り、それ等の著書をみながら出版の苦労を思い出すのも楽しみの一つである。

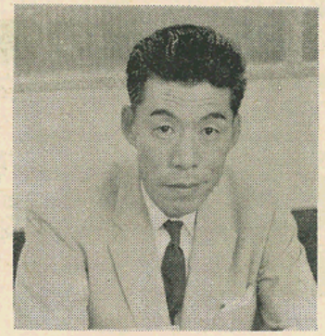
アルミニウム箔製造加工

日本製箔株式会社

取締役社長　杉山昌作

本　社　吹田市東御旅町10-70　TEL (680) 2151-5
東京営業所　東京都中央区銀座西7-2　TEL (572) 2341-5
工　場　吹田・京都・藤井寺・三国

緑丘人物譚 (7)



昭和二十五年小樽市に東洋木材企業株式会社という小資本会社を設立爾来十数年の短期間に明晰な頭脳と精力的な斗志で現在資本金五億円、全日本ダンボール業界のトップを歩む聯合紙器に次ぐ大会社にのしあげた彼の存在は小樽高商先輩、後輩諸氏の既に知っているところであろう。

東洋木材企業㈱
取締役社長
手取貞夫（昭17）

× × ×

少年時代彼は小樽の地獄坂を一寸下った緑町の裏長屋にお婆さんの寵愛を一身に受けて育った。生活程度は決して裕福な方ではなく、樽中も中途で退学せねばならない逆境であったようだったが、決してひねたところは無く、明朗濶達であった。

中学を中退して小樽の北海製缶に勤務することにした彼はなかなかの頭のきれる持ち主であった。当時の上役有賀篠夫氏が特に白羽の矢をたて、その将来を買って、学資の一切を援助した。彼はそれに応え中学卒業検定試験に合格、小樽高商を受験。勤務の傍らの無理な勉強のためか、成績は余り良くなく、辛くも補欠として入学した。一年生で学年第一位の成績を収め、二年、三年とも首席、特待生として学校を卒業した。成績が優秀であったため就職は相当条件のよい会社より誘惑もあったが、有賀氏に対する恩義に報ゆるためや、その他の理由によって再び北海製缶に戻り、同社と共に生きる覚悟をきめたと聞いている。当時を知る人は彼にまさか、このような才能が潜んでいるとは夢にも思わなかったであろう。

× × ×

諺に「大智は愚の如し」とあるが全くその通りである。やゝ分厚い唇から洩れる彼の言葉は重々しく風彩は決して秀才型とは見えないが、話の論理は整然とし、時に冗談を交え、語る魅力的な彼の思考は人の心をひきつけずにはおかない。相手の心底を読み、計画的に事を運び「エスキモーに氷を売る」ほどの抜け目のない商才の持ち主である。

競争のはげしい木材、ダンボール業界のなかで東洋木材企業㈱を僅か十数年にして今日の座にまで育成した彼の才能は二千人に一人あるかないかと云われる。それでこそなし得た業であろう。

× × ×

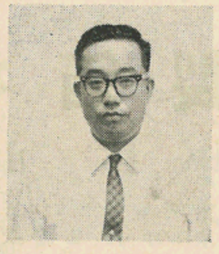
部下の使い方もやゝ残酷のように見えるが、非常に妙を得ている。特に男子社員に対しては、その斗志を逆利用する。これは彼の少年の頃の体験から出たものであろうが、逆利用された社員は非常に幸福である。何故なれば奮起することによって自分が大きく成長するからである。また半面非常に人情味に厚いことも見逃せない。

× × ×

趣味は非常に広く、碁、将棋、マージャン、ゴルフ等を嗜むが、なかなか人伍に落ちない。特に碁は棋院の二段、勝負には非常に強い。ゴルフはオフィシャル20、プレーのスタイルは一見20には見えないが何処かにシブトサがひそんでいる。

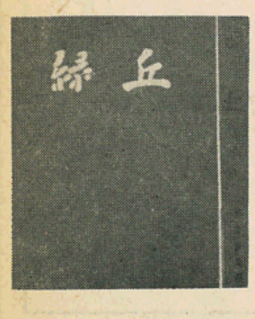
酒も結構ゆける方である。談論風発、なかなか愉快である。時にはなまめかしい唄も歌う。よくこんな彼に、あの非凡さがあるのかと不思議に思った事が度々あった。

ともあれ今後益々発展される事を期して止まない。



訪問者　丸山邦彦（昭一九）
北海製缶株式会社勤務

緑丘 綴じ込み表紙 申込受付



「緑丘」綴じ込み表紙ができました。三カ年分の「緑丘」を綴じ込めるよう計画しました。
希望者は二〇〇円お送り下さい。
大阪市東区道修町三丁目　塩野義製薬㈱　墓目英三宛

7月10日
京阪神合同ビールパーティー
サッポロビール大阪工場で

去る七月十一日、サツポロビール大阪工場において、恒例の緑丘会京阪神支部合同のビールパーティーが開催された。

全くうだるような暑さで、不快指数の針は、その頂点をさして固定するような日だったが、定刻の十四時になると緑丘会員は続々とつめかけた。二時少々すぎ、石田支部長の音頭による乾杯で会は開かれ、最適温度摂氏七度のビールが次々とあけられた。有り余るほどのオツマミは六百円の会費を決して高いものとは思わせなかった。

校歌、進軍歌、寮歌のバツクミュージックがムードをかもし出すなかで、墓目副支部長が母校の学生会館落成式の学長挨拶をテープレコーダーで聞かせてくれる。

藤井氏（昭九）が、熱海で開催された同期会に出席された恩師諸先生の様子を披露されると、懐しげな歓声が処々に湧きおこった。

谷本朋次大先輩（大八）が、卒業四十五年を迎えての感想を語られる言葉には出席者一同唯黙して聞き入るのみだった。

今回の出席者五十数名の中には初めての出席者が比較的多く、自己紹介が次々に行なわれた。

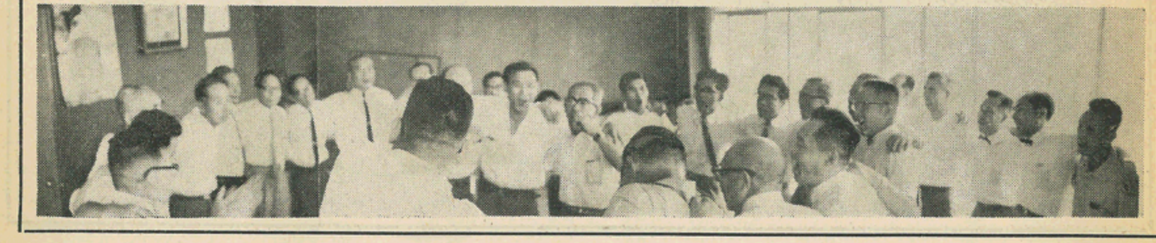
各寮出身者が各々の寮歌を高唱し進軍歌、校歌がなごやかな円陣のなかで椎名先生のタクトで大合唱された。谷本先輩の音頭で幾回となく乾杯が続くなかで、終る筈のない宴が終りをつげた。

それにつけても（私見になりますが）昭和三十年代の卒業者の出席が少いのが寂しい限りです。

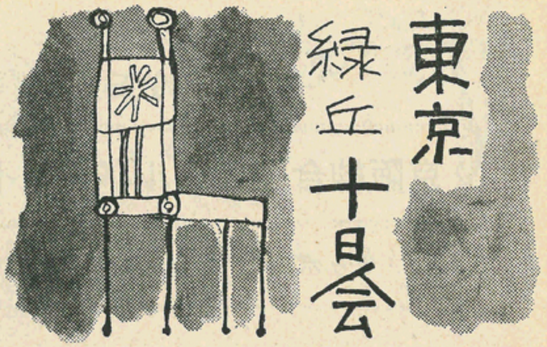
緑丘会は諸先輩の努力ではぐくみ育てられてきた。それを更に一層強力く飛躍させてゆくために、若い緑丘会員よ打ち揃って出席していただきたい!!

（角記）

㊤記念撮影
㊥乾　杯
㊦幾つになっても忘れぬストーム



東京緑丘十日会



七月例会

七月十日午後五時半から東京ステーションホテル二階宴会場で七月の例会を催したが、暑さの関係もあり出席者が意外に少なく二十八名であった。当番幹事（大正十二年卒）の御骨折りで、ゲストに塩月弥栄子氏を迎へ、NHK「私の秘密」の裏話を聞いたがテレビでは塩月さんを知って居ても、なまの容姿に接し、話を聞くことは始めての人がほとんどであるため、非常に興味深かった模様で終始和やかな雰囲気の内に八時十分散会した。

出席者

苫米地先生　加茂学長
T3宮崎　省三　T5青田　滝蔵
T8間室　守親　T9板倉　誠
T10大谷　敏治　T11小橋　庸三
T12石川　一　T13堀川　源作
T12日南田美文　T12加地　幸一
T12鞍掛　駿郎　T12村井弥三治
T13広野　幸一　T13谷　弥太郎
T13古関　周蔵　T14椎野良之助
T15神田　正英　S3佐竹　繁寿
S3加藤羽衣松　S3道善　宇内
S4宮袋　虎雄　S11高木　重信
S13山本　俊雄　S13金垣　英雄
S13福田　次助　S36大久保良雄

八月例会

日時　八月十日午後五時半
場所　銀座東七ノ二　遊ふき利
余興　萩江「深川八景」
立方今井栄子　唄　荻江寿尾
三味線　萩江之友
三味線　荻江寿美

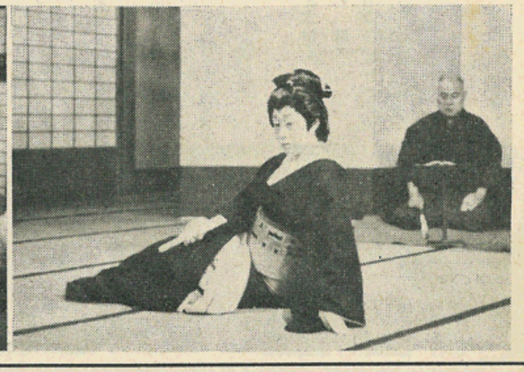
大正十三年卒業生の当番幹事の企画で右のような鎖夏例会を試みたのは意外に冒険でもあったが、今井栄子女史の華麗な舞踊が魅力なのか、萩江節の心に泌み込む節々が緑丘人に訴へるものがあるのか、萩江寿尾という人の持つ魅力なのか、出席者は大先輩のお歴々が逸早く姿を見せられ、三二名の多数が当番幹事としては大いに安堵した次第でした。

営って伴先生御壮健の時、その時も大正十三年のわれわれが幹事当番の折、この今井女史を煩わしましたが、十年経った今日女史の美しさは些の衰へをも見せず出席者の諸兄に充分楽しい時間を過して頂いたことを倶に喜んでいる次第です。

宴会で諸兄の盃は高浜虚子先生命名の「小鼓」で充され（寿尾師匠わざわざ蔵元から輸送の銘酒でした）諸兄の殊の外の好評を博し、和気アイアイ、時のすぎるのも忘れるほどでした。

出席者

大3柳瀬　伊蔵　大3宮崎　省三
大3下吹越栄吉　大4佐々木周一
大4上村甚四郎　大9影山　茂
大11太田　省三　大12小沼　武文
大13久保田敏三　大13谷　弥太郎
大13古関　周蔵　大13広野　允幸
大13高浜　年尾　大13中尾　晃
大15広島　進　大15神田　正英
昭2小貫　武　昭2手島恒二郎
昭3三浦　強太　昭3根田　順治
昭4大場　忠久　昭4宮袋　虎雄
昭5河野　通雄　昭5越前谷順治
昭6川島　豊秋　昭8能沢　正義
昭8八木　勇平　昭11高木　重信
昭13高野憲一郎　昭13山本　俊雄
昭16亀山　英夫



（古関周蔵氏撮影）

今春日魯漁業の社長に就任した田上東稲氏のために、われわれ大正十二年の同期生が集り、石川一氏の世話で会場はステーションホテルを準備し、祝賀会を開催しました。

本日の出席者二十七名、加地幸一氏、安田吉助氏等次々祝賀のテーブルスピーチを行い名残はつきず楽しい一夕を過ごしました。

上段右ヨリ
高坂　恒一
安田　吉助
沖田寅之助
金子　英
日高田美文
土岐　頼明
田島正太郎
小林　虎雄
奥野　定一
竹田　吉郎
船津　皐二
都築　実
太田　利隆

中段右ヨリ
小沢　武文
白石　啄二
江口　行雄
田上　東稲
麻生　正夫
神部健之助
武林　俊三

下段右ヨリ
石川　一
能代　鉄雄
高橋熊太郎
加地　幸一
石川松三郎
堀川　源作

昭和十九年卒二〇周年記念の集い

来る十一月十四日（土）芝プリンスホテルに於て昭和十九年卒は二〇周年記念の集いを催す事となり、案内状が発送された。九月十四日現在で出席者四十九名、当日までに五十名を越す予定である。

積水化学工業
新日本窒素肥料
旭化成工業
特約代理店　プラスチックの綜合商社

田中弥商事株式会社

取締役社長　田中弥三郎（大12）　専務取締役　山家利典（昭13）

（本　社）　大阪市東区北浜2丁目74番地　TEL(06) 6556代～9
（東京出張所）　東京都千代田区神田淡路町2丁目19番地　TEL(25)2271・5259

小樽緑丘会第二回定期総会

八月八日生憎くの雨で出足がにぶったが、新装の学生会館が会場であったのが幸いしたのであろう、予想を越えた出席者で総会々場に急いで椅子を追加する有様であった。

開会を待つ間、学生会館の豪華を云々し、また一寮（北斗寮）跡の標識を懐しげに見入る会員もあり、同窓の会合らしいソフトなムードが醸し出された。午後四時十分開会を告げるアナウンスが行われ、一同揃って会場に入る。

新谷幹事長（昭一五）開会を宣し讃岐会長（大一二）病欠のため、小林副会長（昭一一）が議長を勤める。

議案第一号　昭和三十八年度会務報告、ならびに会計報告は満場一致承認

議案第二号　昭和三十九年度事業計画ならびに収支予算案は新役員に一任

議案第三号　役員任期満了改選の件は議長指名による詮衡委員七名により詮衡が行われたが、病気療養中の讃岐会長の後任詮衡は結論がつかず後日改めて詮衡委員会を開催して厳重に詮衡し、その結果を以て本日の総会の決定とすることに満場一致承認、副会長、幹事長はこの一年間仕事らしい仕事をしなかった罰として留任、新らたに副幹事長として宮下新太郎君（昭二〇）を選任、満場一致これを承認した。

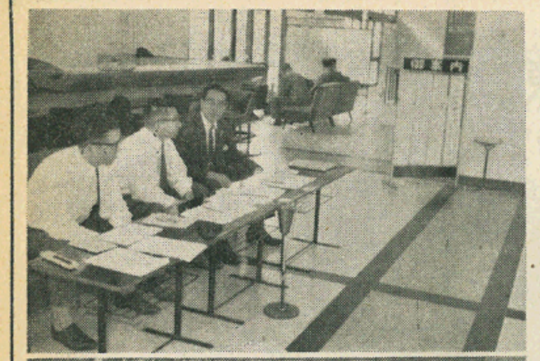
議案第四号　その他協議事項については本会の今後の運営の在り方について会員の意見を求め、有益な意見を承り、それを役員会において反映させることゝした。

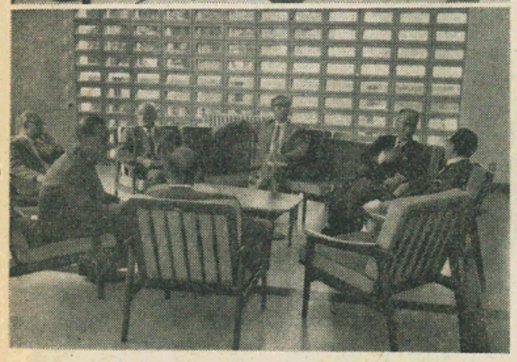
午後四時四十分全議案を議了したので総会を終了、引続き学生会館内の食堂において懇親会を開催した。

大学側から加茂学長、室谷教授が来賓として臨席され、学長より会館建設、計算センター設置について払われた同窓会、後援会の努力に対し感謝の言葉があり、一同久し振りの会合で、旧交を温め、また室谷教授の往時を偲ばせる、お元気なスピーチ、そして同教授が今回札幌短大学長に就任された旨の御報告に接し、一同室谷学長の御健闘を心から祈念した。宴たけなわとなり、学長はじめ新旧同窓の余興が行われ、午後六時盛会裡に幕を閉じた。

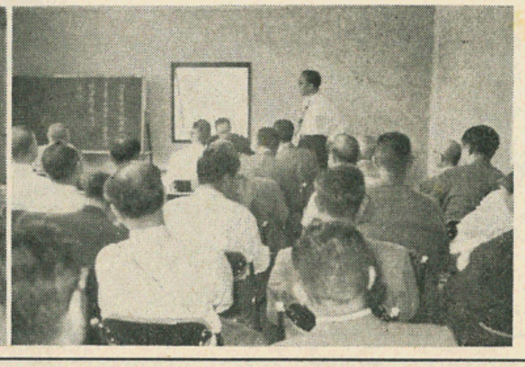
なお詮衡委員会は八月末日に開催して長老の意見を充分に採り入れて会長を決定する予定であります。

（小林　啓作）





（上）受付風景　（右）熱心に議案を審議する会員
（下）ロビーの懇談風景　（左）懇談会席上の加茂学長挨拶



大正十一年卒業　緑士会

緑士会の記事は、この緑丘紙上で度々お目にとまったことと思うが、私達は大正十一年度卒業生であるから十一即ち士の字を取って緑丘会の一部である緑士会としたのである。

現在緑士会の会員は九十五名で、この内三分の一強が東京および、その近郊に在住、または在勤している関係上、会の主体は在京生なので、東京を中心として毎月、その日取に卒業年度に因んで十一日に中食会を催している。但し十一日が土曜または日曜日に相当した月は休会とする。幹事は二人で持ち廻りとし、任期は一年とする、東京のほかに地元の札樽会、阪神会も適時に開催している。

出席者は毎回いくら少くとも四―五人、多い時は二十人を越すことも再三であり、時には日時が決っているので、偶々当日地方から上京した人が顔を出してくれることも少くなく、卒業以来初めて、すなわち四十年振りで会い、誰だったか分らず、名乗られて初めて君だったかということも一―二回にとどまらない。

なお毎月の会合のほか、持別会合として新年会および忘年会、また春の一泊旅行を開催しており、特に春の旅行は妻君と同行の人もあり、誠に楽しく、昨年の静岡の浜名湖周遊に引き続き、本年は京都また明年も既に北陸と予定を決めており、夫々其の地方の方々に幹事として御斡旋、御尽力を願い、年毎に盛大になっている。

さらに同期生間の消息集を昭和二十七年四月、卒業時三十周年を記念して第一号を発行し、爾来号を重ねて本年六月に四十一号を発行しており同期生および家族の慶弔その他消息を詳しく知ることが出来て仕合せしている。

このように当会が長年に亘って盛会を続け、同期生相互の関係が極めて親密であるのは偏に杉山昌作君の不断の御骨折の賜で一同感謝に堪えない処である。同期生は夫々既に還暦を越し、第一線の社会生活をしている人は少くなる一方で、第二、第三の生活に移っているが、幸いこの会を中心としてお互に援助し、激励し、慰問しあって元気な顔を見せあいたいと心から願っている。

（一九六四年八月）　（小橋　記）

土田秀雄君の生涯

梶川亨（大一一）

緑丘弓道場わき、階段下の小部屋でわれわれ六人の者は、ランタン・クラブなるものをつくって、当時流行のインスタント・ポスタムをのみながら、文学、哲学を論じたものだった。その主宰者は土田君だった。いまは大半幽明境を異にしてしまったが彼は聰明で人情味が厚かった。

『根室からピーナツツ・バターが来たから喰べに来たまえ』と言われて緑町の下宿に出掛け、彼の提琴を聞いたものだ。

卒業して一緒に栗林に入ったが、下宿は四谷塩町で、ここでも二人は起居を共にした。実業界―これは二人の性格に合わぬ必然性を持っていた。五月に入って小生退社すると彼も、すぐ自分のあとを追うように辞して根室商業の教師になった。同期の粂田君も、そこに勤務していたがショペンハウエルの哲学に読み耽って、ある夏、津軽海峡に投身自殺を遂げてしまった。小野寺君や立原君も不幸な最後であった。

土田君は志を立てて東京高商に入り、病を得て南湖院に病臥した。そして、こゝで大熊信行先生と思想的に深い交りをつづけた。

院長より
賞とてわれに賜わりし
フリージャの花に妹こそ想わめ
（歌集『氷原』）

これが当時の作品であった。次いで慶応病院に入院して手術を受けられた。

ははそはの
母を思へば手術台に
素裸の身をさらしかねたり（同）

その頃アララギの同人でもあった大塚金之助教授のえいきようを受けたが、大熊先生の『まるめら』に参加活躍した。しかし土田君の短歌の源泉をなしたものは万葉であった。

小生出征中に寄せられた激励の便りは、しばしば前線のぼくの眼を涙で曇らせた。そして帰還と同時に土田君が校長をしていた柏崎商業の教頭に迎えられた。君の家でいただいた道産の海産物―たとえば花咲蟹、ひしやも、フレップ酒などが喰辛抱の小生にうれしかった。

釣りあげし
氷背魚(こまい)は既に凍てつきて
びくに収むる手にも冷たき（同）

この「こまい」は「ひしやも」のことであろうと思うが、小生には、はっきりわからない。

ひしやもひしやもは
愛（かな）し手にとれば
あわれひしやもは灯に透きて見ゆ

柏崎では初雪の米山の壮麗な姿が今だに忘れられない。

ひさびさに
晴れし朝なれ
米山は襞あざやかに雪をつけたり

心深く
触れたる友と別れ来て
仰ぐ星空のかくも澄みたる

昭和十七年不肖が岐阜高農に移ると土田君は大連高商の教授として赴任された。しかし、やがてこゝから応召という一大事に会われた。

まなかいの
山もはつはつ緑して
いのち愛しき春を我が征く

戦地では筆舌に絶する労苦を重ねられた。次が戦地での作品である。

野に住めば
萩の小枝を箸となし
かなしき食に生命つなぎぬ

牛の群れに
眼をあげわれを見る
その静けさに泣きたくなれり

言の葉の
わからぬまゝに貰いたる
ロシヤ煙草の香りよろしも

終戦と共に再び大連のわが家に帰ったけれども、こゝにまた生活苦が始まる。しかし土田君は、その憤りをこめた苦悩を短歌に表現した。

ジャムバーを
売りたる金を握りつゝ
大連市場の雑踏に立つ

一椀の
粟かゆありて朝夕の
飢を凌ぎつ年を迎えぬ

五千五百円の
鶏の水炊きしかすがに
インフレ大連に酒を汲むかな

其後新潟の少年鑑別所の官吏となられたが、生活は楽ではなかった。

かべなべて
五十路を越えぬ現し身の
やすらぐほどの時をもたなく

それから新潟大学商科短大教授として赴任し、その清廉さ、その純情さで多くの学生を感化訓陶された。その頃ご夫妻で九州旅行の途中、拙宅にも一泊され喜々として旅立たれたのが昨日のように思い出される。しかし、こゝでも悲しい哉、発病入院、胃がんであるが医師は家族にだけそれを洩らし、本人には、それを秘していた。病ついに癒えず、昭和三十七年三月三十一日午後一時不帰の客となられた。かえすがえすも洵に惜しき人物を喪ったものである。

土田君は夕暮を愛し、淋しさを愛し、鳴る枯葉を愛し、かさこそと鳴る枯葉を愛した歌人であった。つぶさに人の世の辛惨をなめながら、変らぬは只君の深い友情、正念（ルーエ）である。小生は故人のご冥福を衷心よりお祈りすると共に、ご遺族の一人一人もご多幸であれかしと願うものである。先日の新潟地震には御被害はなかった旨お便りがあった。おくつきところは柏崎市にあり昔の教え児たちの香華が絶えない。柏崎は土田君の第二の故郷と生前から、この地を愛して居られたからである。意余って言葉足らず、まだまだ書くべき事があるけれども、いずれ、その機にゆずり一と先ずこのへんで擱筆させていただきます。

（昭和三十九年七月九日）

＝大阪支部＝
八月度十日会

スピーカー若山永太郎氏
ボーイズ・ビーアンビシヤスの反省

〝ボーイズ・ビー・アンビシヤス〟これはクラーク教授の有名な離別の言葉である。この句は〝青年よ大志を抱け〟と訳され〝青年よすべからく野望をもて〟と教えられた。ところが本年3月の朝日新聞「天声人語」欄をみて、私は非常な衝撃をうけた。

原訳には『青年よ大志をもて。それは金銭や我欲のためにではなく、また人呼んで名声という空しいもののためであってもならない。**人間として当然そなえていなければならぬあらゆることを成しとげるために大志をもて**』とある。大切なのは最後の言葉である。この言葉が最初の言葉に深く強く照応している点を味わおう。そうであれば「青年よ大志を抱け」でも一向に差つかえない。人間完成のために野心的であることは立派だからだ。という。

彼は本年6月、北海道出張の際、記念碑に立寄り、この真意をもう一度確め、自身猛省したと語った。

其後「緑丘」の発展策について討議を続け一時二〇分会を閉じた。

編集後記

☆緑丘人の陶磁器特集号をお届けします。あんまり堅いもの許りでもいけないと思いちょっぴり変った特集をお届けした次第です。何時もの事ですが特集号の時に投稿がいただけずに発行してから実は書こうと思って忘れていたんだと次号に投稿される方があります。編集部としては全く気抜けがいたします。どうぞ特集の予告がたとえ小さな見出しであっても、特集となれば鉢巻をして頑張っているのですから一せいにメ切日に間に合わせて下さい。

☆次の特集は戦没学生特集号です。投稿御希望の方はスグはがきで、その旨御連絡下さい。メ切日十月十日ですがスペースをあけてお待ちします。もう続々原稿が到着しています

☆「あまりいゝ緑丘にするな」とブレーキをかけて下さる先輩が居ります。二〇頁が目下校正も費用も共に編集部の限界です。前号は四十二頁、今月も四〇頁です。倍大号になっている事を御承知下さい。御後援を惜まざる諸先生の暖い御高配と広告を賜りましたスポンサーに厚く御礼を申上げます。

オリンピックの年に贈る！

料理缶詰
世界の味

御中元に
絶賛好評

全国デパート・有名食品店
明治屋等外商部取扱

エム・シーシー食品株式会社

代表取締役　水垣敏正（昭五卒）

神戸市長田区苅藻通5丁目15　TEL神戸（67）1245(代)